

次郎丸高石 2

- 次郎丸高石遺跡第 6 次調査報告 -

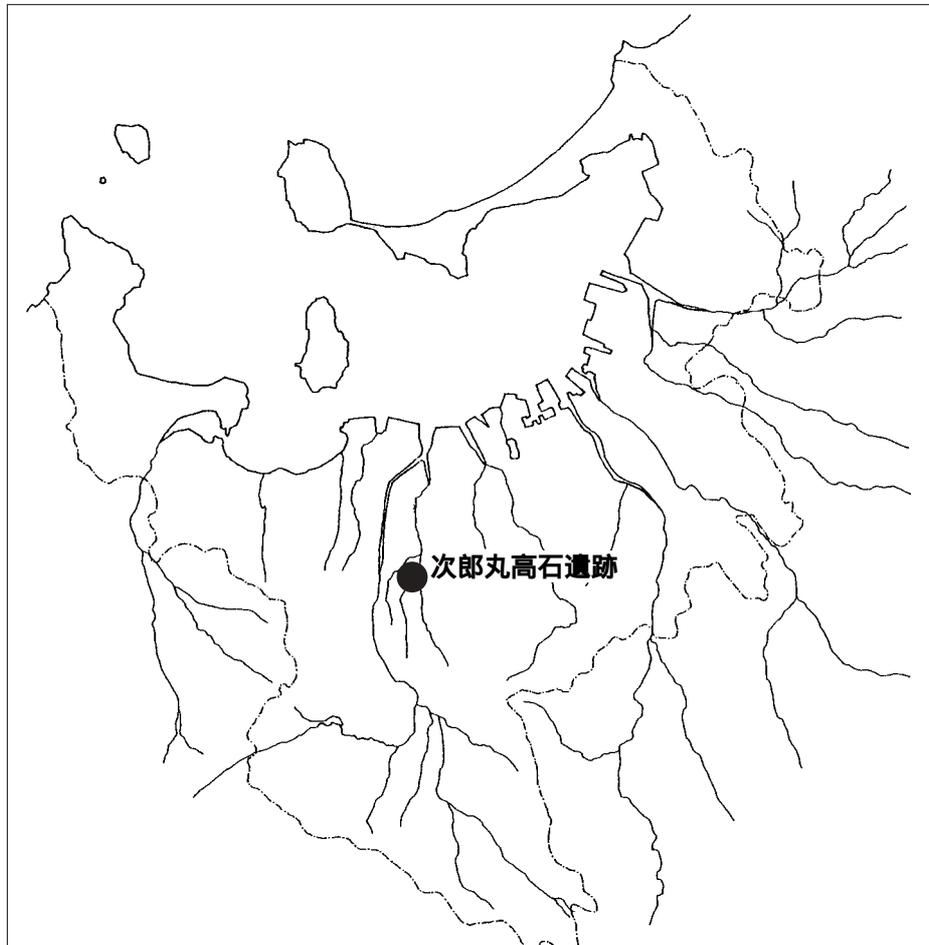
福岡市埋蔵文化財調査報告書第840集

2 0 0 5

福岡市教育委員会

JI ROU MARU TAKA ISI
次郎丸高石 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第840集



次郎丸高石遺跡 6次

調査番号 0315

遺跡番号 JRT6

2005

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な努めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成15年度に実施した道路改廃事業に伴う次郎丸高石遺跡第6次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として利用頂ければ幸いです。最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例 言

- 1．本書は道路改良事業に伴い早良区次郎丸6丁目において平成14年5月11日から同15年1月30日に発掘調査を実施した次郎丸高石遺跡第6次調査の報告である。
- 2．本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21′西偏する。
- 3．遺構番号は各区ごとに付け、頭に溝：SD、土抗：SK、ピットSPの記号を付した。
- 4．本書に使用した遺構、遺物の実測、写真撮影は調査担当者が行った。挿図の製図は土井良伸、岡田裕之、担当者が行った。
- 5．本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、安永令子の協力を得た。
- 6．本章の執筆は担当者が行った。
- 7．本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

遺跡調査番号	0315	遺跡略号	JRT 6
所在地	早良区次郎丸6丁目10 1、 8 9、8 8・83 1・87 4	分布地図番号	83(野芥)
開発面積	3823.01m ²	事前審査番号	13 1 820
調査期間	2003.05.11～2004.01.30	調査面積	1307m ²

目 次

はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
立地と環境	1
調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 区の調査	4
3 区の調査	16
4 区の調査	17
終わりに	24

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (1/25000)	
Fig. 2 次郎丸高石遺跡調査地点と周辺の地形 (明治34年) (1/20000)	2
Fig. 3 次郎丸高石遺跡調査区位置図 (1/3000)	3
Fig. 4 区位置図 (1/1200)	4
Fig. 5 区遺構配置図 (1/200).....	5
Fig. 6 SK001、005、006実測図 (1/20)	7
Fig. 7 SK001出土遺物実測図 1 (1/3).....	8
Fig. 8 SK001出土遺物実測図 2 (1/3).....	9
Fig. 9 SK005、006出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig.10 SK002、003、004実測図 (1/40)	11
Fig.11 SK002・003・004出土遺物実測図 (1/3).....	12
Fig.12 SK010、011、012、013、014実測図 (1/20)	13
Fig.13 SB015、016実測図 (1/80).....	14
Fig.14 SB015、ピット出土遺物実測図1/3).....	14
Fig.15 区その他の出土遺物実測図 (1/3).....	15
Fig.16 区位置図 (1/1000)	16
Fig.17 区遺構配置図 (1/200).....	16
Fig.18 区位置図 (1/1000)	17
Fig.19 区遺構配置図 (1/200).....	17
Fig.20 区西壁実測図 (1/40)	18
Fig.21 溝断面、S K 004実測図 (1/40).....	19
Fig.22 溝出土遺物実測図 (1/3).....	20
Fig.23 土抗実測図 (1/40)	21
Fig.24 土抗出土遺物実測図 (1/3).....	22
Fig.25 ピット断面図 (1/40)	23

図版目次

- Ph. 1 1区全景（北東から） Ph. 2 1区全景（南から）
 Ph. 3 2区全景（南から） Ph. 4 1区SK001（南から） Ph. 5 2区全景（北から） Ph. 6 区SK001完掘後（北から） Ph. 7 区SK001遺物出土状況（南から） Ph. 8 区SK005（北西から）
 Ph. 9 区SK006（西から） Ph. 10 区SK006完掘後（北から） Ph. 11 区SK002（北から）
 Ph. 12 区SB015（東から）
 Ph. 13 区SD009（北西から） Ph. 14 区SD009、SK011（北西から） Ph. 15 SD009土層 Ph. 16 区SK010（南から）
 Ph. 17 区SB009、SK010土層（東から） Ph. 18 区SK012（南から） Ph. 19 区SD013（北から）
 Ph. 20 1区SK014（南から）
 Ph. 21 区全景（北から） Ph. 22 2区全景（東から）
 Ph. 23 区全景（南から） Ph. 24 区SD001（南から）
 Ph. 25 区SD001（西から） Ph. 26 区SD002（南から） Ph. 27 区SK005、006（東から） Ph. 28 区SK006（北から）
 Ph. 29 区SK004（南東から） Ph. 30 区SK011（南東から） Ph. 31 区ピット群（西から） Ph. 32 区西壁土層（南東から）

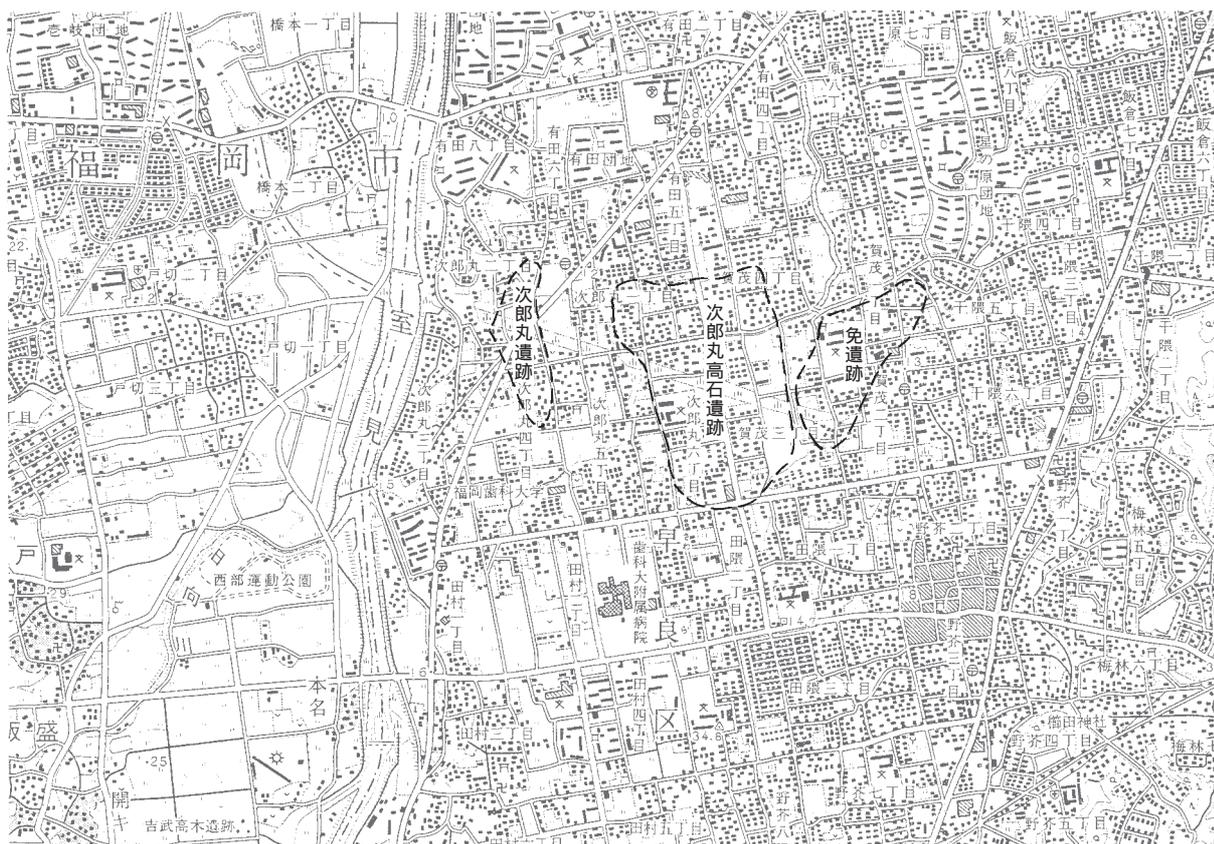


Fig.1 周辺の遺跡分布図(1/25000)

はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会では、文化財保護法第57条の3に係わる事業について、事前に事業計画を把握し、埋蔵文化財保護のための調整を進めている。2001年11月1日付けで福岡市土木局(西部建設1課)から、早良区次郎丸6丁目地内における市道有田重留線道路改良事業計画地について、埋蔵文化財有無確認の依頼があった。これを受けて埋蔵文化財課では、同年11月から2002年2月にかけて計画地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財が遺存することを確認した。

埋蔵文化財課では、当該計画内容について現状での保存処置の検討を行った。しかし、工事計画の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けられないものと判断し、やむなく記録保存の処置をとることとした。

記録保存の発掘調査は、土木局(西部建設1課)の依頼を受けて、福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では埋蔵文化財課を担当とし、2002年度に次郎丸高石遺跡第5次調査として2,830㎡の調査を実施し、2003年度に整理報告を行った。さらに、2003年度には前年度移転未了等で調査を行えなかった部分について5月21日から断続的に2004年1月30日まで1307㎡の発掘調査を実施した。本報告はその成果について報告するものである。

2 調査組織

事業主体 福岡市土木局西部建設第1課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第1係長 力武卓治

調査担当 池田祐司

調査作業 阿比留忠義 有江笑子 井上八郎 上野道郎 海津宏子 金子由利子 下司照枝 指山歌子
柴田勝子 永島重俊 平井和子 広瀬梓 堀川ヒロ子 門司弘子 安河内史郎 吉川春美

立地と環境

次郎丸高石遺跡は早良平野の中央部に位置し、沖積扇状地上に立地する。遺跡の範囲は、東側は金屑川、西は花立用水が北流する辺り、北は立屋敷の集落付近までと認識されている。かつての水田地帯は宅地造成の盛土により旧地形を止めていない。これを水田面の標高に求めると南端付近で12.7m、北端で8.0mと北へ向かう緩斜面であり、800mでその差4.5mを測る。この傾斜と同様の方向に河川、水路が流れ、その間は微高地となる。次郎丸高石遺跡はこうした微高地上に在る。調査地の地盤は、耕作土下に礫層が露出している部分と、礫層のくぼみに青灰色シルト、黄褐色シルトが乗る部分がある。また、5、6次調査地点では水田下に黒褐色のクロボク状の土壌が残る部分があり、これが本来の地表面を示すと考えられる。

次郎丸高石遺跡はこれまでに5次に及ぶ調査が行われている。(Fig.3)

1次調査は現在の次郎丸中学校建設に伴うもので、浅い谷を挟んだ地形で実施された。1区では溝、ピット、杭列、不定形土抗群(風倒木か)等を検出し、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代の遺物が出土した。2区では調査区西端の溝状遺構から縄文時代晩期の土器が出土している。3区では東側が高まりとなり、弥生時代中期の土抗、ピットを検出し、土器、石斧等の石器が出土している。3区は今回報告の6区に隣接し、高まり、遺構群ともに連続するものである。

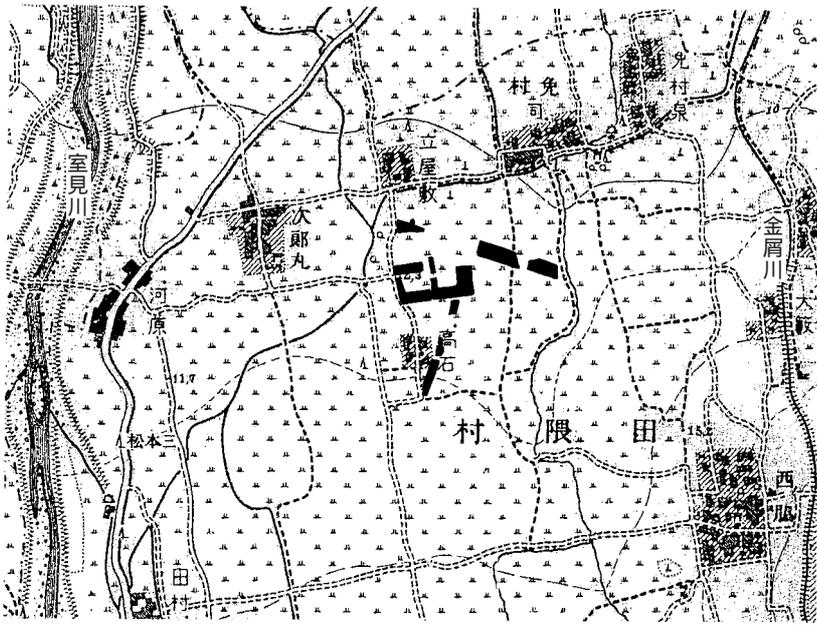


Fig.2 次郎丸高石遺跡調査地点と周辺の地形(明治34年 1/20000)

2次調査は1次調査の北で道路建設に伴い行われた。区の東西幅60mほどの微高地部分で土抗や多数のピットと掘建柱建物が検出され、縄文晩期以降で4～5世紀を主体とされている。区には古墳時代の土抗等がありここから3次地点までの東西80mには浅い谷が入る。区では西側への段落ちがあり、次郎丸遺跡2次調査地点に至る400mは浅い谷状となる。

3次調査地点は1次調査の北東に位置する。区では8世紀代の自然流路、13世紀から

15世紀代の南北、東西の条理に沿った溝を確認し、平行して走る南北溝は道路の側溝と考えられている。15世紀代の遺構としては15棟の南北棟の掘建柱建物群が検出され、この集落は北へ広がりそうである。区では6世紀後半から8世紀の溝を検出している。さらに金屑川の東岸の免遺跡2次調査では古墳時代後期の流路でアーチ状の井堰を検出している。この区から免遺跡2次地点にかけては現在の金屑川につながるものであろう。

4次調査は2次調査の北側に接する地点で行われ、弥生時代から古墳時代の多数のピット、掘建柱建物2棟を検出している。

5次調査は今回の調査と同じ原因の道路建設に伴い実施された。遺構は散漫だが全域に見られ、平安時代と考えられている2×5間の掘建柱建物、古墳時代前期の土抗、そのほか断面フラスコ状の土抗、風倒木痕等が検出され、縄文時代、弥生中期、古墳前期、平安時代、中世の遺物が出土している。

東側の微高地には次郎丸遺跡があり、4次の調査で、古墳時代前期の溝、古代末から中世後半の掘建柱建物、井戸等の遺構が確認されている。遺物では遺構の時期の他に縄文晩期の土器、石器、刻目突帯文土器が出土している。

以上、室見川と金屑川に挟まれた沖積地の微高地に、弥生中期、古墳時代前期、古代末、中世全般にかけての集落が営まれた様相の一端が明らかになりつつある。

次に文献等について若干確認しておきたい。Fig.2の明治34年の地図には、次郎丸、立屋敷、高石の集落が見られる。近世では一帯は次郎丸村に属し元禄国絵図には枝郷として高石村、次郎丸村の内として立屋敷村がある。また、筑前國續風土記拾遺には立屋敷について「此人家四方に高土手を築り。其形方なり。昔大家の人の宅址のよしいひ傳ふれとも、其由来詳ならず。」とあり、少なくとも天保年間には土手を伴う屋敷地があり、すでにその成立に付いては遠い過去のものになっている。

- 三筑遺跡・次郎丸高石遺跡 69集 1981：次郎丸高石1次
- 福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告1 467集 1996：次郎丸1次、次郎丸高石2次
- 次郎丸遺跡 468集 1996：次郎丸3次
- 福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告2 536集 1997：次郎丸高石3次、免2次
- 福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告3 535集 1997：次郎丸2次
- 次郎丸高石1 797集 2004：次郎丸高石5次
- 角川日本地名大辞典 40 福岡県 1988
- 日本歴史地名大系第四一巻 福岡県の地名 2004 平凡社

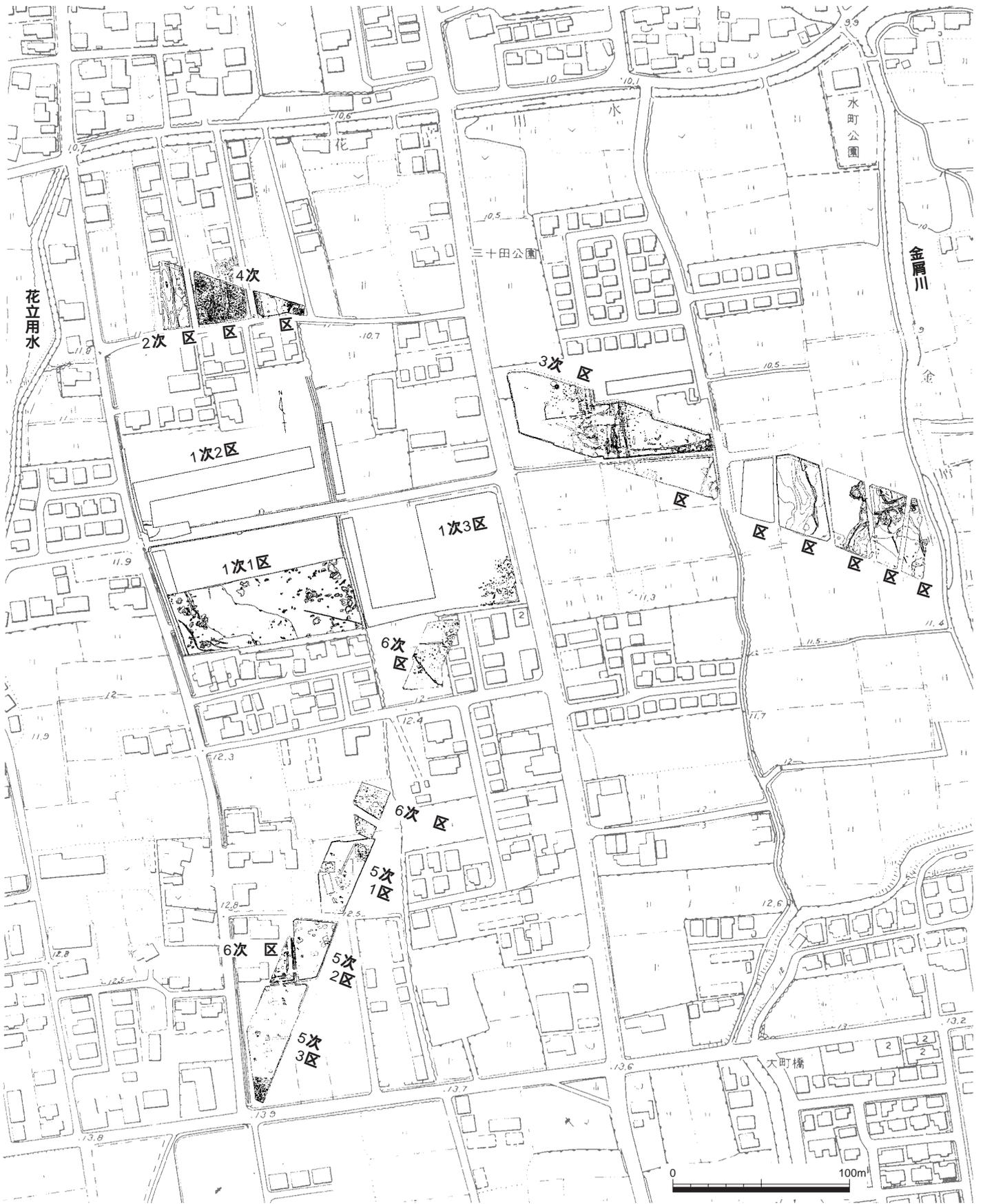


Fig.3 次郎丸高石遺跡調査区位置図(1/3000)

調査の記録

1. 調査の概要

6次調査は、平成14年度に引き続き5次調査区の北側部分から1次調査の南までを対象とし、現行の道路を挟んで北側を区、南側を区とした。また、5次調査2区西側で現行の水路保全のため未調査であった部分を区とした。(Fig.3)

2. 区の調査

区は現行の道路を挟んで1次調査の南側に位置する(Fig.4)。幅17mの750.4㎡について調査を行った。現状は水田を埋め立てた宅地で、調査は真砂土約75～150cmと旧表土を重機により除去することから行った。このため排土置き場の必要から南北に排土の反転を行って調査を行い、北半を-1区、南半を-2区とした。

遺構面は耕作土直下の青灰色粘質シルト、黄褐色シルト上面である。見た目はほぼ平坦だが、北西に向かってわずかに下がり、北西の区画は水田造成で削平されている。等高線を見るとFig.5のように調査区の東側が微高地となり北西部分には浅い谷が入る。標高は南端で11.42m、北東端で11.34m、北西端で11.16mを測る。

遺構は溝、土抗、掘建柱建物、ピットを検出した。時期がわかるものでは弥生時代中期を中心とし、調査区北東側の微高地で密度が高い。

(1) 溝

SD009(Fig.5、12、Ph.3、13) 調査区南東隅から北西に向かう幅40から60cmの溝で、わずかに南西側に弧を描く。断面はおよそU字形を呈し、後に述べる土抗SK010等を切る。土層はSK010、011の土層図(Fig.12、Ph.14、15、17)に示した。覆土は灰色砂質シルトを主とし、底には暗褐色粘質土がたまる。遺物はごく小片が出土したのみで時期を判断することはできない。1次調査において5本の溝を確認しており、規模と方向から1次調査1区の5号溝が今回のSD009の続きである可能性が高い。その前提に立てば、SD009はさらに北へ緩やかな弧を描き、現在の道路部分で西側へと急な弧を描くか屈曲し、延長90m以上になる。また5号溝でも遺物は出土しておらず時期は不明である。

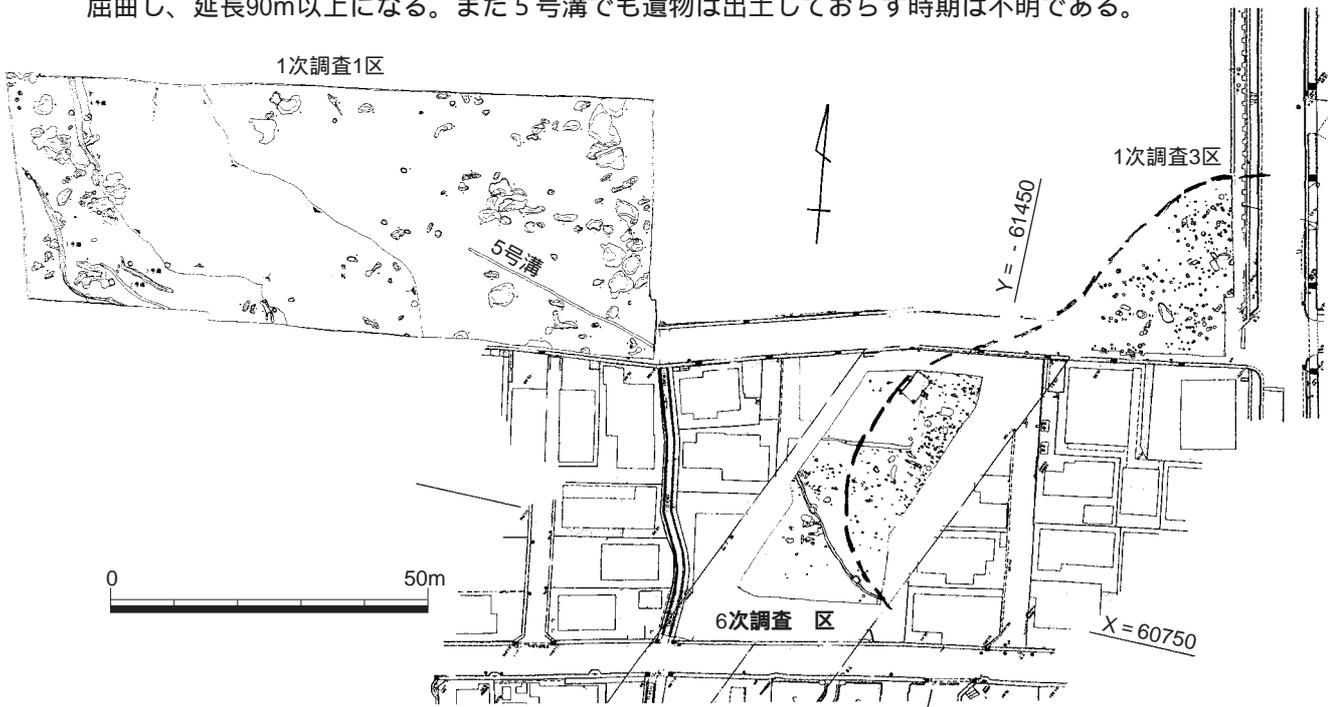


Fig.4 区位置図(1/1200)

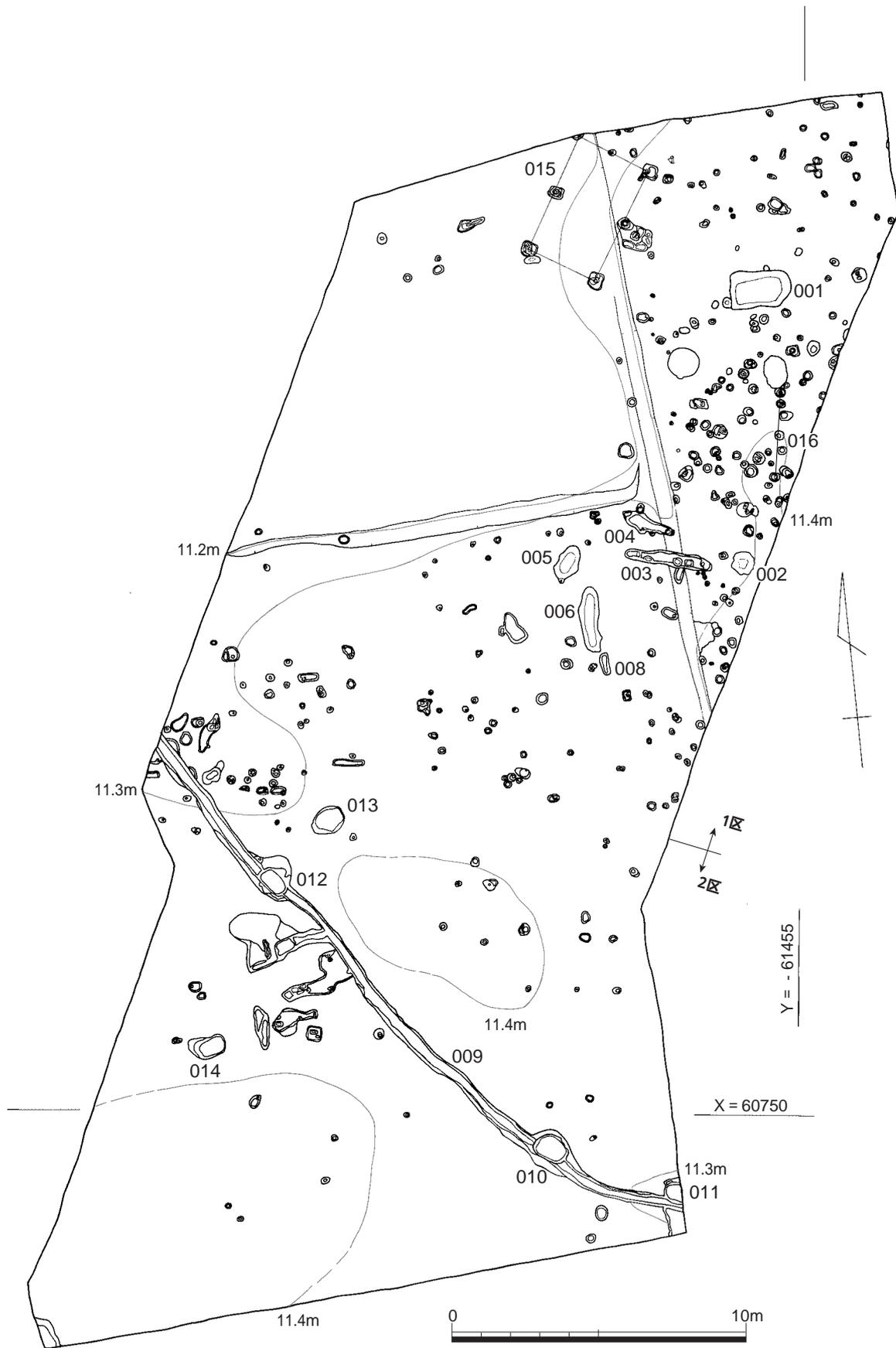


Fig.5 区遺構配置図(1/200)

(2) 土抗

北東側のピット集中部で弥生時代中期の遺物が多く出土した SK001、005 などを、南西側では SD009の周辺にSK010、011などを検出した。

SK001(Fig.6、Ph4、6、7) 調査区の北東側で検出した土抗で東西方向に長い平面不整形長方形を呈し、207×125cm、深さ25cmを測る。黄褐色シルトの面を切り込み、覆土は炭混じりの暗褐色粘質土でほぼ均一である。床面には凹凸がある。覆土からは弥生中期の土器を中心とした遺物が多く出土した。遺物は南北断面に見られるように中央部分は床面直上で出土するが、壁際では10から15cmほど浮いている。土抗がある程度埋まった段階で遺物が捨てられたと考えられる。平面的には北半に多い。

出土遺物(Fig.7、8) 1から11は甕である。1は北半の全体に破片が広がる。上部の1/2が欠損する。逆L字口縁部が内傾し、内面には急な稜を成す。復元口径は26cmである。胴部上部に最大径部があり24.5cmを測る。胴部下部は直線的にすぼまり、厚手の底部は径6cmで上げ底を成す。胴部には刷毛目調整が比較的明瞭に残り、10本/cmほどの密度である。刷毛目は下から上へ、長さ10cm弱の4～5段階で施す。内面はなで調整を丁寧に施す。刷毛目調整の後に口縁部には横なでを行う。外面には煤がわずかに付着する。色調は外面口縁部は橙色、胴部下部は淡灰褐色から灰茶色、内面は淡橙色を呈す。2mm大までのやや大きめの砂粒までを含み、胎土は粗い。焼きは良好である。2は口縁部がやや厚手で1/3からの復元口径21cmを測る。外面には密度6本/cmほどの刷毛目調整を施し、口縁部は横なである。3の口縁部は直線的な形状で外面は6本/cmの刷毛目調整、内面なでで口縁部直下には木口痕が残る。4は口縁端部が欠損する。口縁下に1条の低い三角突帯を巡らし、横なでを施す。胴部には刷毛目調整が見られる。器壁は厚手である。5は逆L字口縁の小片である。6は小振りで強く内傾する逆L字形の口縁部で小型の鉢状の器形になると考えている。外面には9本/cmほどの刷毛目を施す。7は南半で出土した胴部下部から底部で底部径6.5cmを測り若干の上げ底で、外面端部がわずかに張り出す。外面に刷毛目調整が見られるが内外面とも器面は荒れる。8は北側中央部で出土した底部で底部径6.8cmを測る。外面には刷毛目が明瞭に残り、その密度は7本/cmである。内面には縦長の指圧痕が残る。外面には若干の煤が見られる。灰茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。9は1/4からの復元。外面刷毛目だが荒れる。北西側からの出土。10は若干の上げ底を成し、外面刷毛目調整である。11は顕著な上げ底で外面刷毛目調整を施す。南西側からの出土である。

12から21は壺形土器である。12は大きく外反する口縁部に短い頸部を持つ。1/4からの復元口径13.6cmを測る。口縁端部は面取りがなく細く深い沈線を巡らす。頸部と胴部の境には段状の沈線を施す。外面は横なでを施し、内面は研磨調整である。器壁は厚く淡橙色を呈す。13は鋤形口縁で器面は荒れるが口縁上部にわずかに赤色顔料が残る。14は鋤先口縁を成し端部に細く浅い刻み目を施す。南側からの出土。15は口縁部の鋤形の発達が小さい。なで調整を施し橙色を呈す。16の鋤形口縁部は外傾し、やや長めの口縁部を持つ。西側中央からの出土。1/4からの復元口径21.2cmを測る。口縁部内面の屈曲部には深い沈線を施す。外面は横方向の研磨の後に縦方向に暗文を施す。内面には横方向の研磨と指圧痕が見られる。胴部との屈曲部外面には浅い沈線を施す。赤みを帯びた茶色を呈し、化粧土を施したと考える。17は胴部で1/2弱からの復元。北半全体から出土した。最大径は上部にあり27cmを測る。小振りの三角突帯が巡る。外面は下部は縦から斜め、中位から上部は横方向の研磨調整を施す。内面はなで調整で上部には刷毛目または擦過の工具端部痕跡が残る。外面は明茶色で化粧土がかかり、内面は淡橙色を呈す。16と同一個体の可能性がある。18は大型壺の胴部下部で1/4からの復元。北西隅の器台の下から出土した。外面は下部が縦方向、上部が横方向の研磨調整で暗茶褐色、内面はなで調整で淡茶褐色である。19は1/3からの復元。外面は研磨調整で赤色顔料を施す。20は1/4からで南西側で

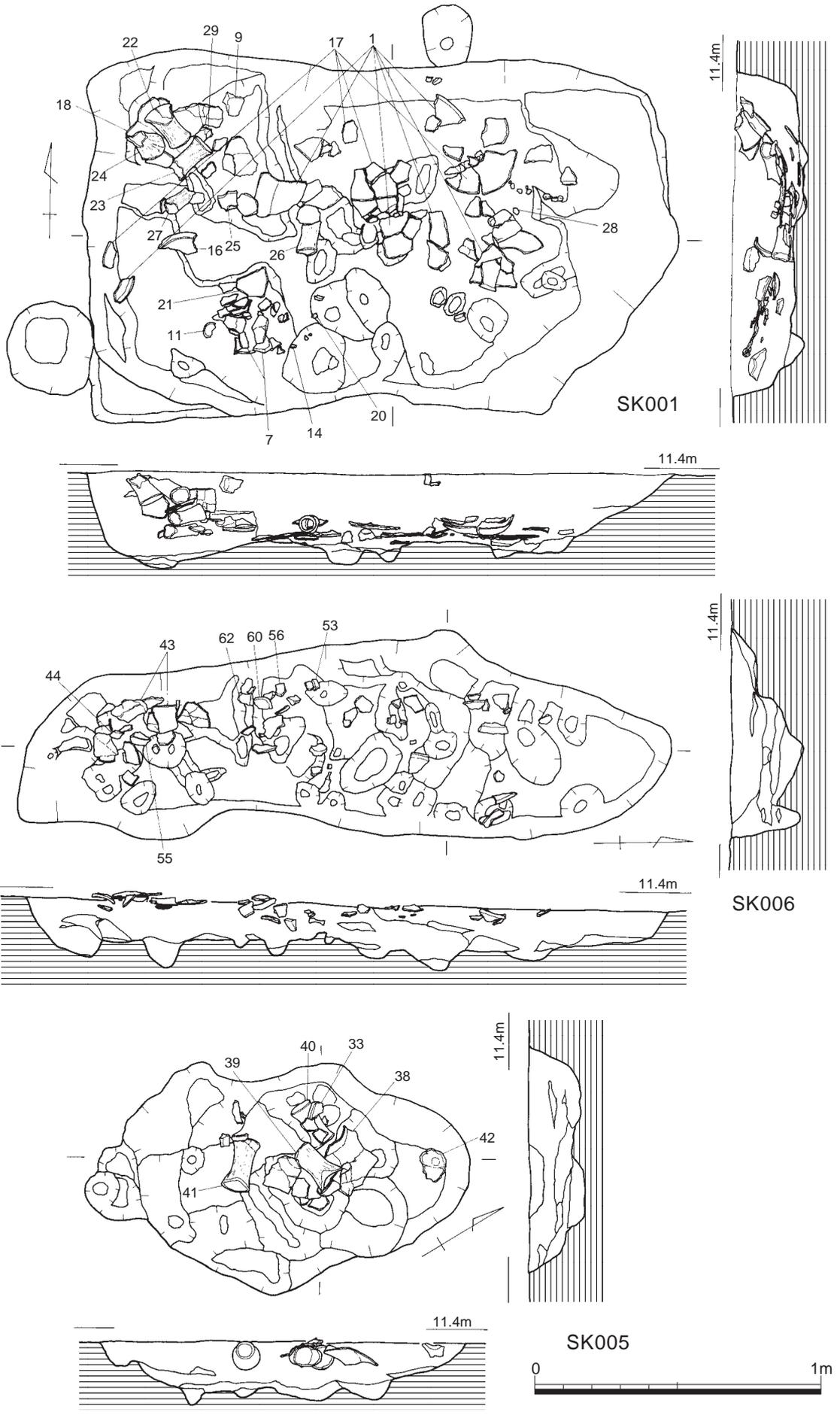


Fig.6 SK001、005、006実測図(1/20)

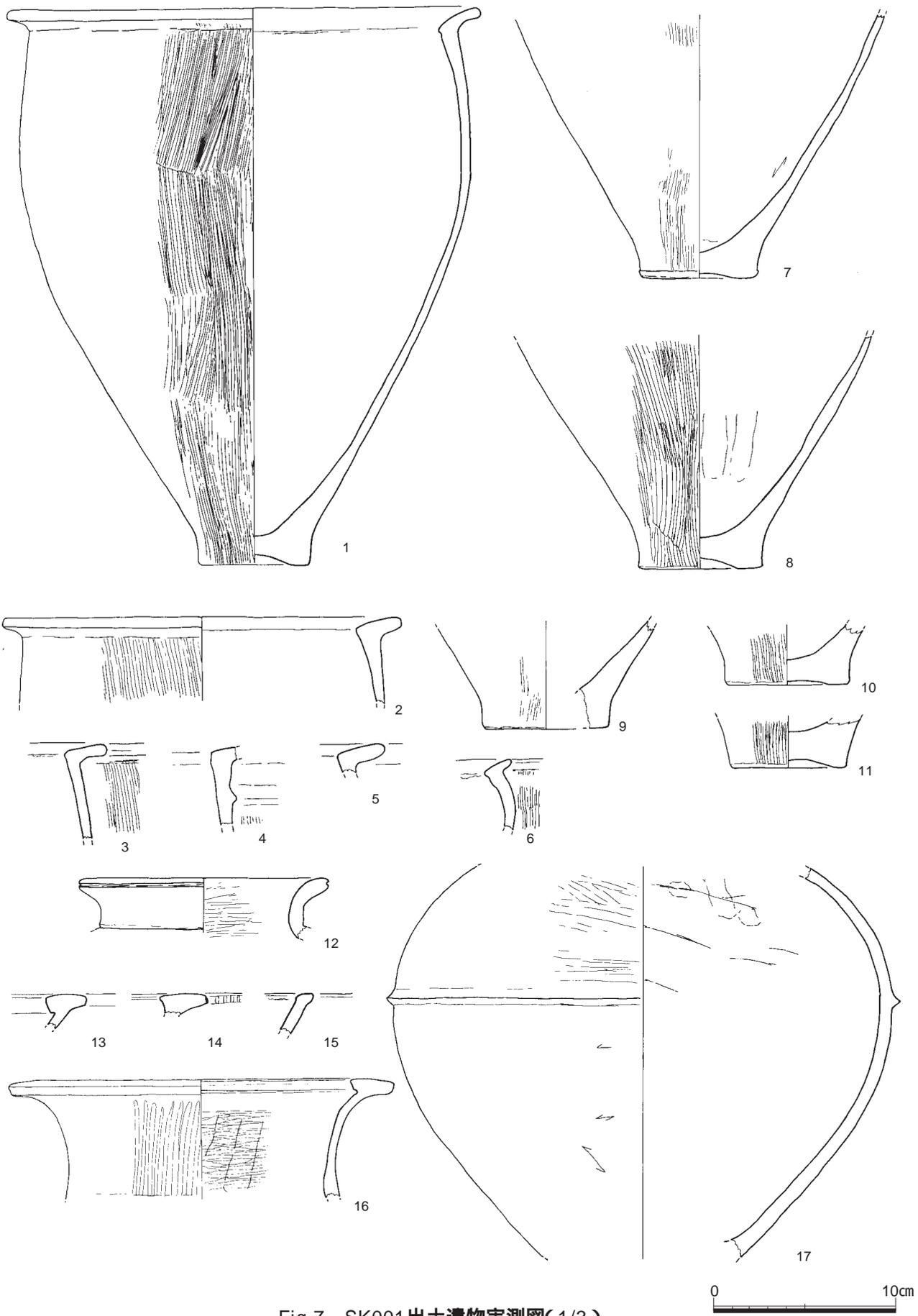


Fig.7 SK001出土遺物実測図(1/3)

0 10cm

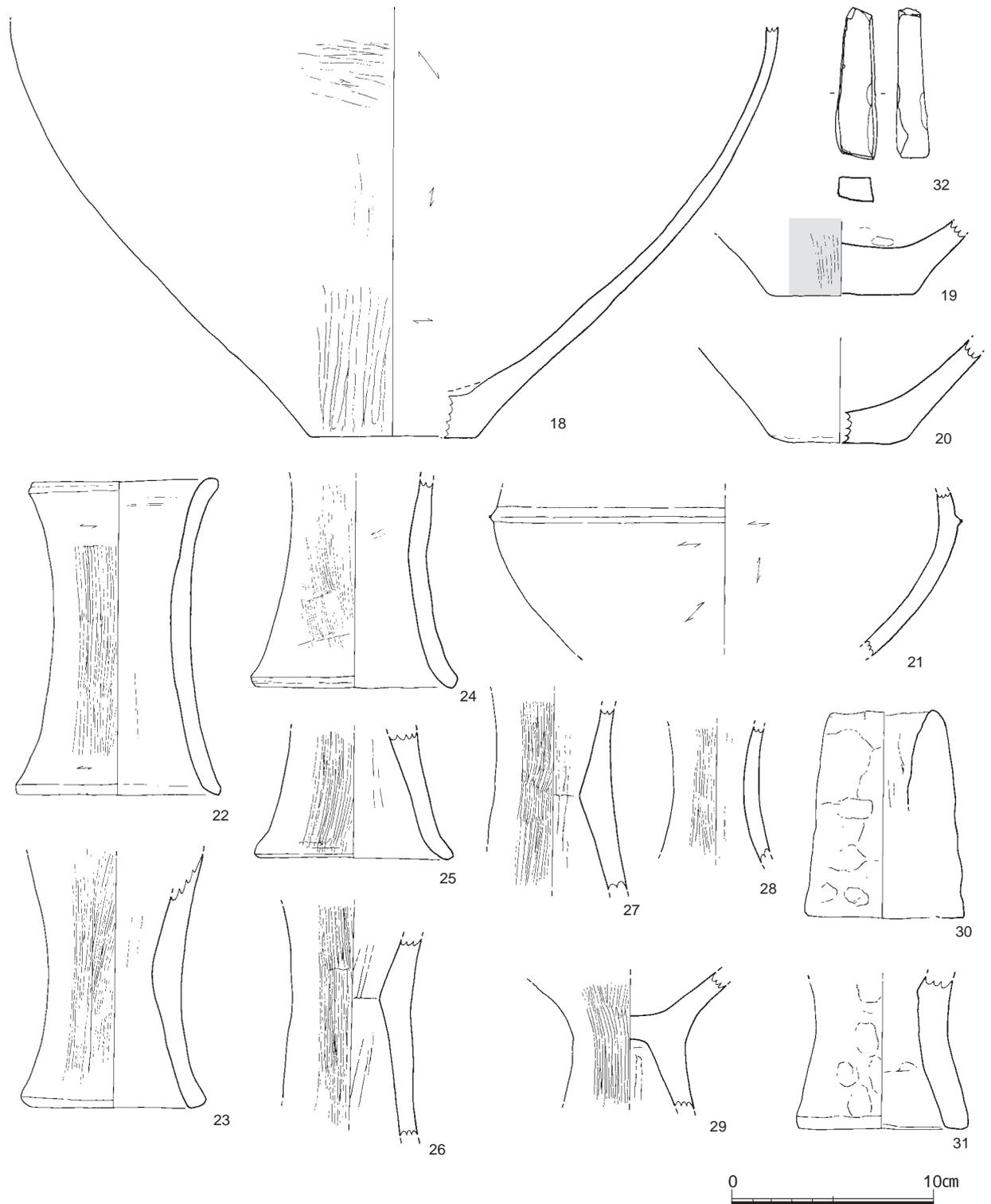


Fig.8 SK001出土遺物実測図2(1/3)

出土。外面は丁寧ななで、内面はなで調整で淡橙色を呈す。17と同一個体の可能性がある。21は南半からの出土で1/6からの復元である。21cmを測る最大径部に低い三角突帯を施す。

22から28は器台である。22から27は北西側からの出土で集中する。特に22、23、24は18の上で接している。28は西側からの出土である。外面はいずれも刷毛目調整で内面はなで26、27には絞り痕が見られる。径が大きな方を下にしたが、上下不明のものが多い。22は完形品で刷毛目調整の後に上下数cmを横なでで仕上げる。23、26、27内面中程は稜を成す。29は高坏、台付きの甕等が考えられるが器形がはっきりしない。30、31は支脚である。内外面ともなで調整で外面は指頭圧痕による凹凸がみ

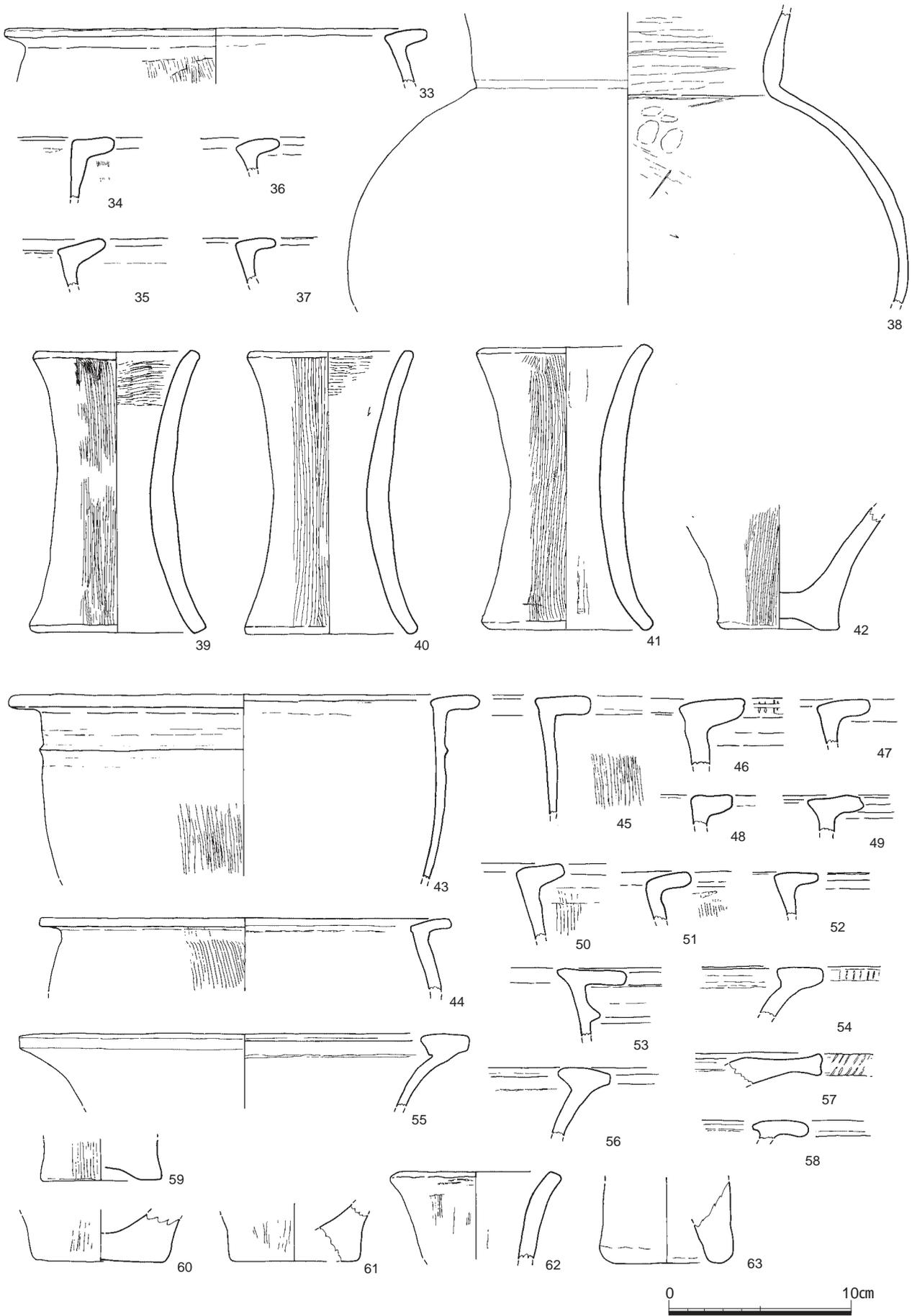


Fig.9 SK005、SK006出土遺物実測図(1/3)

られる。32は砥石で、柱状の細粒砂岩の4面を使用している。

この他黒曜石の剥片、碎片が31点出土したが、使用したものは見られない。

SK005(Fig.6、Ph.8) 南北方向に長い不整楕円形を呈し、135×76cm、深さ20cmほどを測る。底は小さな段、ピット状のくぼみがあり凹凸が著しい。覆土は炭混じりの暗褐色粘質土である。遺構中央の底から5から10cm浮いたレベルに器台を中心とした弥生土器が出土した。

出土遺物(Fig.9) 33から37は逆L字形の口縁部を持つ甕である。33は小片からの復元。33、34は外面刷毛目、内面などの後口縁部を横なです。他は器面が著しく荒れる。38は壺で1/4からの復元。外面は器面荒れ、内面は頸部は横方向の研磨、胴部は擦痕および指頭痕が見られる。胴部最大径30.6cmを測る。39から41は器台で40は完形、39は口縁部が1/4かける程度で残りがよい。いずれも外面は縦方向の刷毛目、内面はなでで39、40には横方向の刷毛目が見られる。42は甕の底部で上げ底で外面には刷毛目を施す。他に黒曜石の碎片2点出土している。

SK006(Fig.6、Ph.9) SK005の南に位置し平面溝状を呈し、450×135cm、深さ20cmを測る。床面には小ピット、段が重なり凹凸がある。覆土は暗褐色粘質土で炭粒を含む。床面から10cmほど浮いた状態で弥生中期の土器が出土した。

出土遺物(Fig.9) 43から53は甕である。いずれも小片が多い。出土位置は図に示した。43は1/4からの復元口径26cmを測り、口縁部下に低い三角突帯を巡らせ、強い横なでを施す。胴部外面は刷毛目、内面はなで調整である。44は1/8からの復元。口縁部は内傾し胴部が張ると考えられる。52までは口縁部が厚手のものが多く、いずれも口縁部を横なで、外面の残りがよいものは刷毛目がみらえる。46は口唇部に浅い刻目を施し浅く細い沈線が巡る。53は大きく高い三角突帯を持ち内面への突起が顕著である。54から58は壺である。いずれも鋤形口縁で54から56は口縁部が厚手で短い。54の口唇部には浅く細い刻目が入る。57は細く長い口縁部で口唇端部に浅く細い刻目を斜方向に施す。59から61は甕の底部で59は上げ底で外面に張り出す。いずれも外面に刷毛目が見られる。62は器台で外面刷毛目、内面なで調整である。63は支脚でなでを施す。他に黒曜石の碎片3点出土している。

SK007(Fig.10、Ph.11) 円形のくぼみ状を呈し平面70×74cm、深さ10cmを測る。床面は小さなピット、くぼみで凹凸がある。覆土は暗褐色土である。SK001、005などと同様の遺構の底のみか。

出土遺物(Fig.11) 64は弥生中期の甕の口縁部で横なでを施す。黄茶色を呈す。65は断面三角形に近い口縁部に厚手の器壁の小型の鉢である。他に黒曜石の碎片2点、甕の胴部片等が出土している。

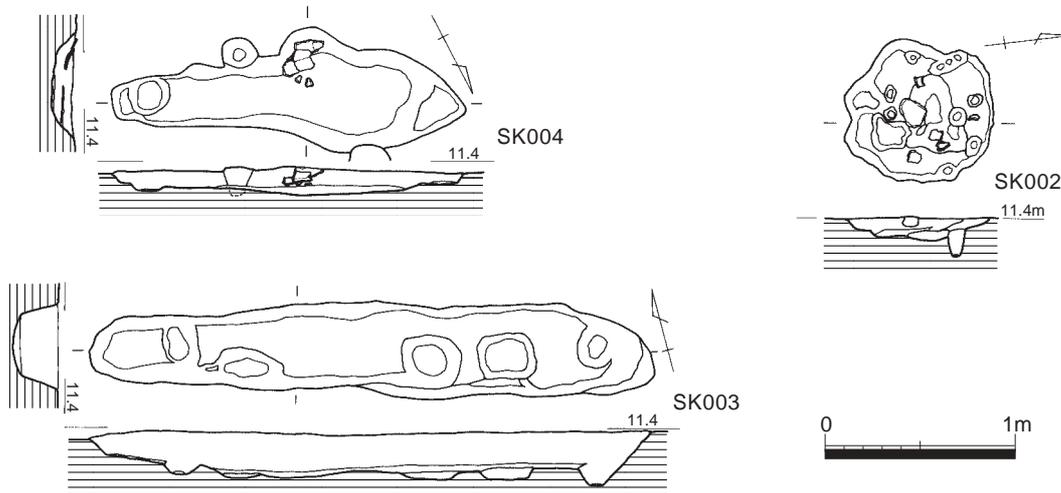


Fig.10 SK002、SK003、SK004実測図(1/40)

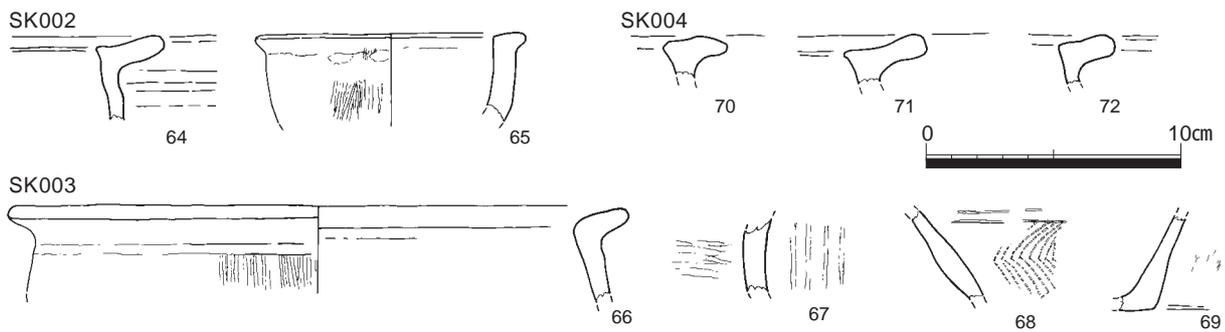


Fig.11 SK002、SK003、SK004出土遺物実測図(1/3)

SK003(Fig.10) 東西方向の長い溝状を呈す。長さ295cm、幅50cm、深さ22cmを測る。床にピット状のくぼみがある。覆土は暗褐色粘質土。

出土遺物(Fig.11) 66は逆L字形の甕で内径する。口縁部など、外面刷毛目調整である。67は壺の頸部で外面は研磨の後縦方向の暗文を施し、内面は横方向の研磨である。68は壺の頸部で浅く細い沈線の下に二枚貝の腹縁による無軸羽状文を施す。器面は荒れるが、わずかに橙色の化粧土が見られる。69は甕の底部と考えられるが器面が荒れ調整等は不明。黒曜石の碎片が4点出土している。

SK004(Fig.10) 東西方向に長い溝状を呈す。長さ184cm、幅56cm、深さ14cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は中央南側から出土した。

出土遺物(Fig.11) 70から72は甕の口縁部で横なでを施す。他に甕の胴部片が出土している。

SK010(Fig.12、 Ph.16、 17) -2区の南東側でSD009に切られる。平面長方形に近い楕円形を呈す。長さ140cm、幅約100cm、深さ44cmを測る。下部はフラスコ状を呈し底は横に張り出す。覆土は暗褐色から黒褐色粘土で底の張り出し部分は地山に近い黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

SK011(Fig.12、 Ph.14) 調査区東壁際で検出した。調査区外に広がり、SD009に切られる。長さ58cm以上、幅約90cm、深さ40cmを測る。北側は下部がフラスコ状に急に張り出す。覆土は暗褐色、灰褐色粘土である。遺物は出土していない。

SK012(Fig.12、 Ph.18) -2区北西側でSD009に切られる。北側は浅く広がる。南側は急な壁を成す。床面で見ると、3つの堀込の切合いの可能性はあるが確認できなかった。最も深いものが平面隅丸長方形の床で長さ80cm、幅48cmを測る。次の西側のもので55cm×50cmほどの円形プランが想定される。南側は隅部分のみで規模は不明である。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK013(Fig.12、 Ph.19) SK012の北東1.5mに位置する。平面上端で不整楕円形、底は隅丸長方形を呈す。上端で120×90cm、底で88×60cm、深さ40cmを測る。断面はわずかに膨らみフラスコ状を呈す。覆土は暗褐色粘土で遺物は出土していない。

SK014(Fig.12、 Ph.20) SD009から南西に5mほど離れる。隅丸長方形を呈し、長さ90cm、幅52cm、深さ54cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で遺物は出土しなかった。

(3) 掘建柱建物

SB015(Fig.13) 調査区北端で確認した1×2間の建物で方位はN-30°Eである。北西端の柱穴の大部分は調査区外である。梁行は150cm、桁行実長415cmを測る。北側の梁行には中心に深い小ピットがあり、関連する可能性がある。柱穴は隅丸長方形に近く50cm前後、深さ40から50cmを測る。東側の桁行の中央、北側の梁行の中央は円形で順に径40、24cmを測る。覆土は暗褐色粘質土に黄褐色の小ブロックが入る。

出土遺物(Fig.14) 73は広口口縁壺である。1/6弱からの復元口径25.8cmを測る。口縁部は横なで、外

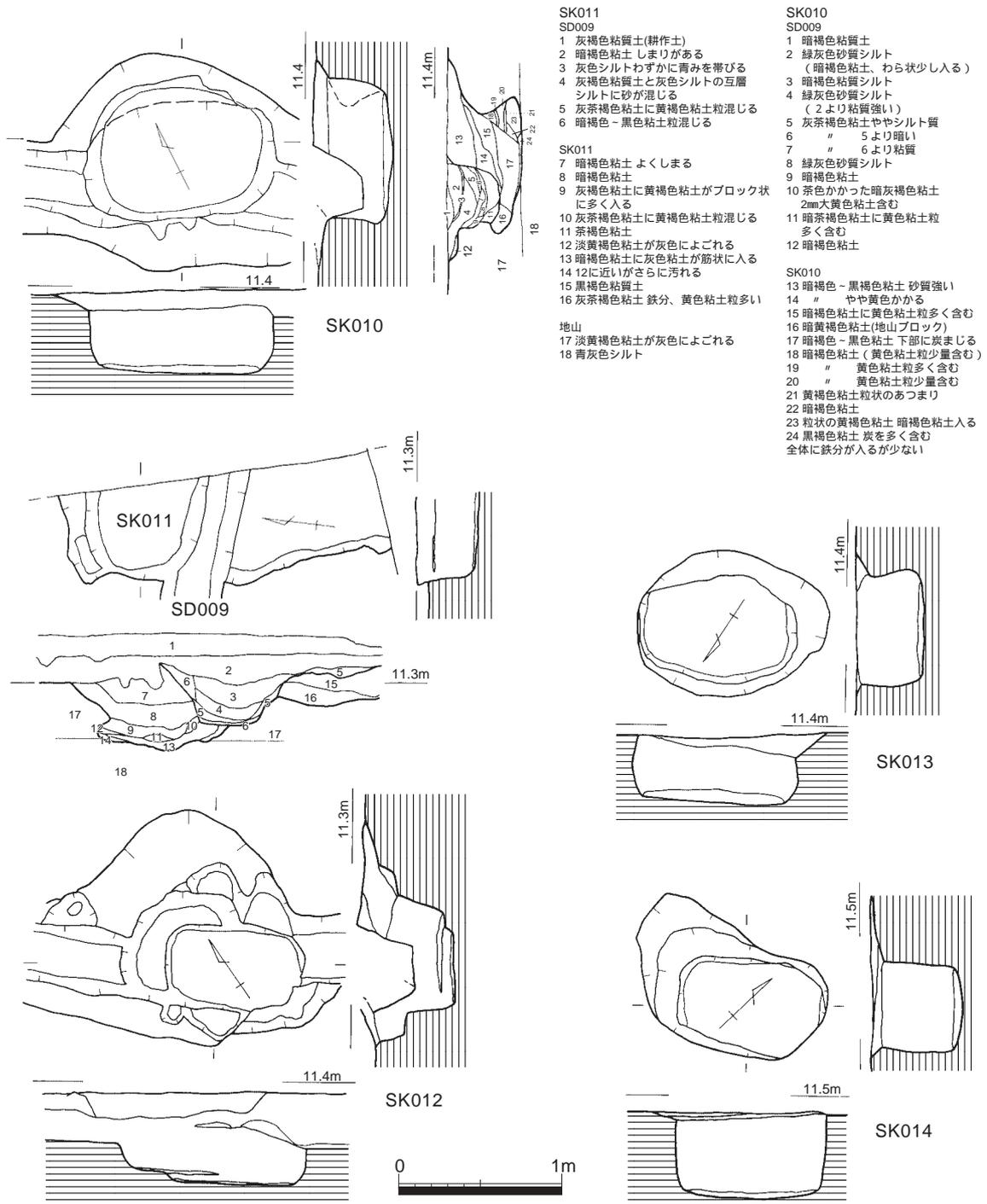


Fig.12 SK010、011、012、013、014実測図(1/20)

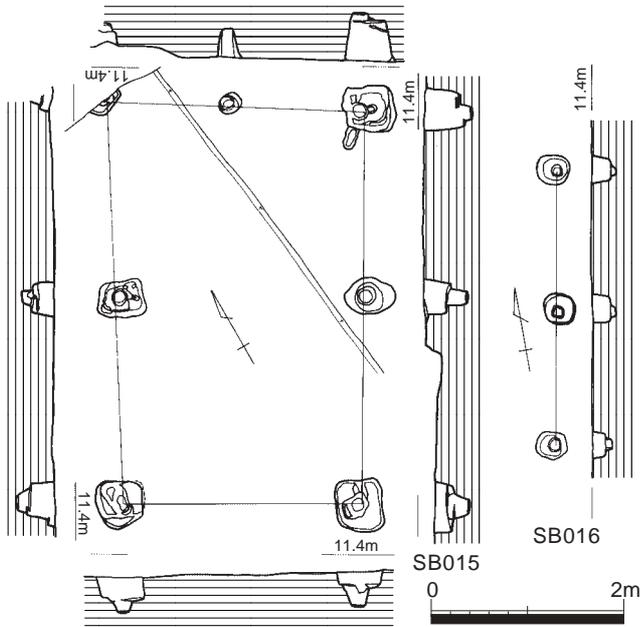


Fig.13 SB015、016実測図(1/80)

面は研磨の後に縦方向の暗文を施す。内面は横方向の研磨だが器面が荒れている。74から76は断面逆L字形の口縁部で横なでを施すが、器面は荒れる。77は器台で刷毛目の後端部に横なでを施す。いずれも弥生中期前半の土器で他の破片も矛盾するものはない。

SB016(Fig.13) 調査区北東側の微高地にはピットが集中するが建物になりそうで展開しない。その中で、直線的に並ぶものを1つ示した。柱間隔140cmを測り柱痕を持つ。柱穴のプランは円形に近く径30cm、深さ25cmほどである。覆土は暗褐色粘質シルトで、SB015や、SK001ほど粘質はなく、色調は暗くない。

(4) ピット (Fig.5、14)

前述したように調査区北東側の微高地で多

くのピットを検出した。ピットの覆土は茶褐色粘質シルトでSK001等に比べて明るく、粘質が弱い。柱痕跡を持つもの、並びそうなものはあるが展開しない。遺物をもつものは265個中91個で3.5割に及ぶが、小片が数個入るものがほとんどである。時期がわかるものはすべて弥生中期の土器で、小片も胎土、色調からは弥生土器と考えられるものばかりである。また黒曜石の剥片、碎片が少量出土している。土器の中のいくつかを取り上げる。

78から81は中期の甕の口縁部である。逆L字状を呈し、81は内側への突出が若干見られる。横なでを施し、80の外面には刷毛目調整が見られる。82、83は鋤形口縁を持つ壺である。82は口縁外端部に浅く細い刻目を施す。83は口縁部横なでで内外面とも横方向の研磨を施す。外面には縦方向の調整がわずかに見られ、暗文の痕跡と考えられる。1/4からの復元。84は壺の胴部で最大径部に低い三角突帯を施す。外面は横方向の研磨、内面はなでを施す。1/8からの復元である。

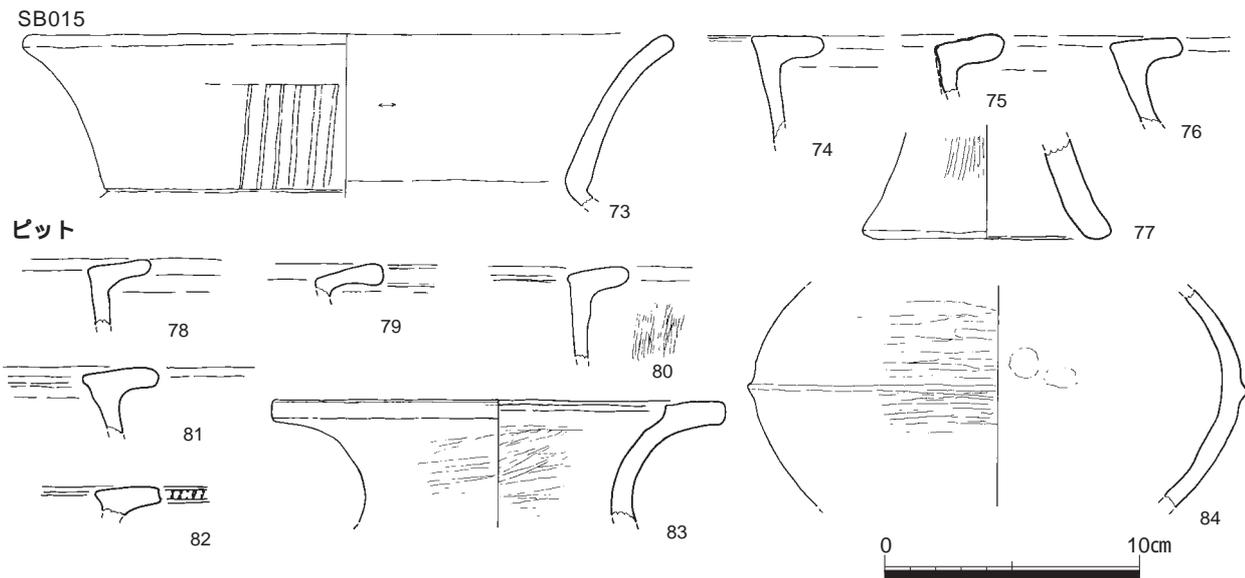


Fig.14 SB015、ピット出土遺物実測図(1/3)

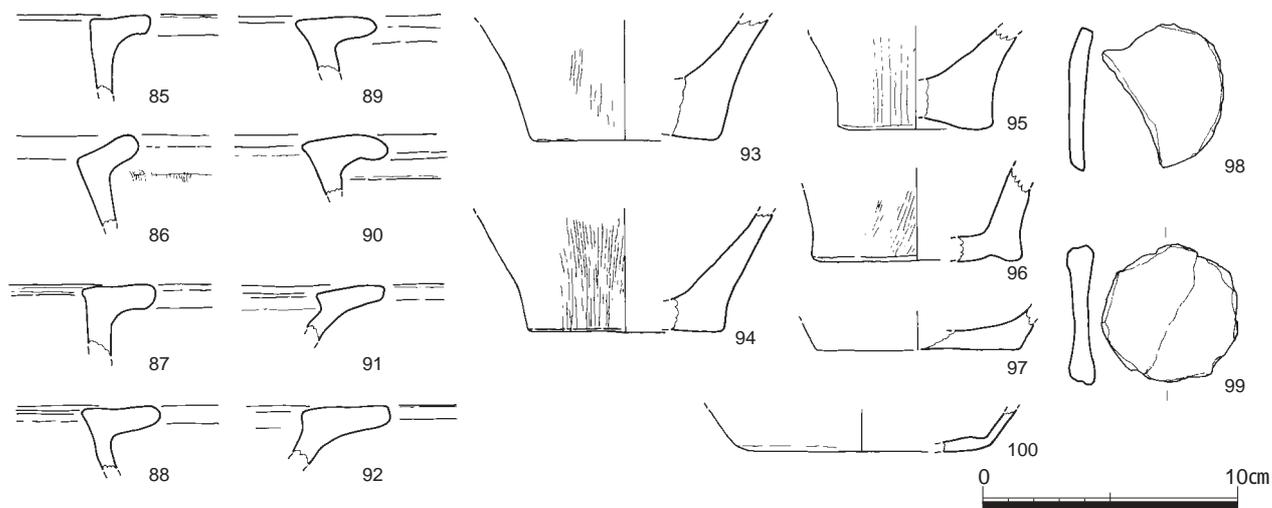


Fig.15 区その他の出土遺物実測図(1/3)

(5) そのほかの遺物

遺構検出時出土や、耕作土等から出土した遺物を取り上げる。出土した遺物のほとんどが弥生土器である。85から90は甕で逆L字口縁で内面に突起をもつものがある。91、92は鋤形口縁の壺である。93から97は甕の底部で外面刷毛目、内面なで調整を施す。98、99は円盤状土製品で98は甕の胴部、99は甕の底部を打ち欠く。100は須恵器の皿で底部へら切り、内面底はなで、体部回転なで調整を施す。1/8ほどの小片だが、弥生時代以外の遺物で図化できるものは少なく、小片もほとんどない。調査区南壁では土人形片が入ったピットがあったが、耕作土を掘込む現代のものである。また、黒曜石の剥片、碎片が検出面で54点出土したが製品、使用されたものは見られない。

3. 小結

区で検出した遺構は北半の -1 区、南半の -2 区で様相を異にする。 -1 区では微高地にあたる東側に遺構が集まる。SK001をはじめとする土抗はいずれも弥生時代中期前半から中頃のものでSK001は一括性の高い資料である。これらの周囲のピット群は土質はやや異なるが、同時期または近い時期のものと考えている。掘建柱建物SB015は埋土が土抗に近く、出土遺物からも同時期と考えられる。これと同様の状況が、Fig. 4 の1次調査の3区でも見られる。3区は調査区の東側の標高が高く北西に向かって低い。遺構は南東側にピット、土抗が集まる。今回の 区とあわせるとFig. 4 のような遺構の広がりが確認できる。分布の中心はさらに東側と考えられる。遺構の時期は今回の 区が中期中頃にほぼ限定されるのに対し、1次調査3区では3号竪穴が前期末、2号土抗、1、2号竪穴が中期初頭から前半、1、5号土抗が中期中頃、2号土抗と古いものが目立つ。

南半の -2 区は溝と土抗を検出したが遺物はないに近い。SD009は1次調査1区の5号溝に規模、埋土が類似し、同一のものと考えられる。時期はSD009の小片のみで決めがたい。底に溜まった暗褐色粘土とSK001埋土との類似から弥生時代の可能性もあるが、特定できない。性格はやや低い土地と言う立地から水田等の給排水に伴うと考えるのが常識的であろう。溝が弥生時代のものではないとしても東側の弥生中期の集落に伴う水田が西側に広がる風景を想定することはできる。SK010から014までの土抗は形態、規模、埋土が一致し、時期、性格とも同じと考えられる。2次2区、5次1区1に同様の土抗があり、遺物はないが弥生時代の貯蔵穴が想定されている。

3. 区の調査 (Fig.16、17、Ph.21、22)

区の現行道路を挟んだ南側の区画について調査を行った。調査は排土置き場、地下埋設管の関係で2カ所に別れ、北から1区、2区とした。現況は区と同じく宅地で1.5mほどの盛土がなされている。1層盛土の下は2層水田耕作土、3層黒褐色土、4層黄褐色シルトで4層上面で遺構検出を行った。検出した遺構はピット、溝である。ピットは径15cmから30cm、深さ5cmから15cmほどで浅く3層に近い黒褐色土を覆土とする。このピットから遺物は出土していない。遺構面は11.43mから11.74mで Fig.17の等高線のように -1 区の南東、 -2 区の北東隅が高く、おおむね西側に向かって低くなる。標高とピットの密度に関連は見られない。 -2 区南側に幅30cmほどの粗砂を覆土とする溝が見られる。遺物は出土していない。また、 -2 区南東端の深さ2cmほどの段落ちは、前年度の5次調査区の端である。なお -1 区の北側はピット状の遺構が薄くなり、水路、生活道路が存在するため調査を行っていない。



Fig.16 区位置図(1/1000)

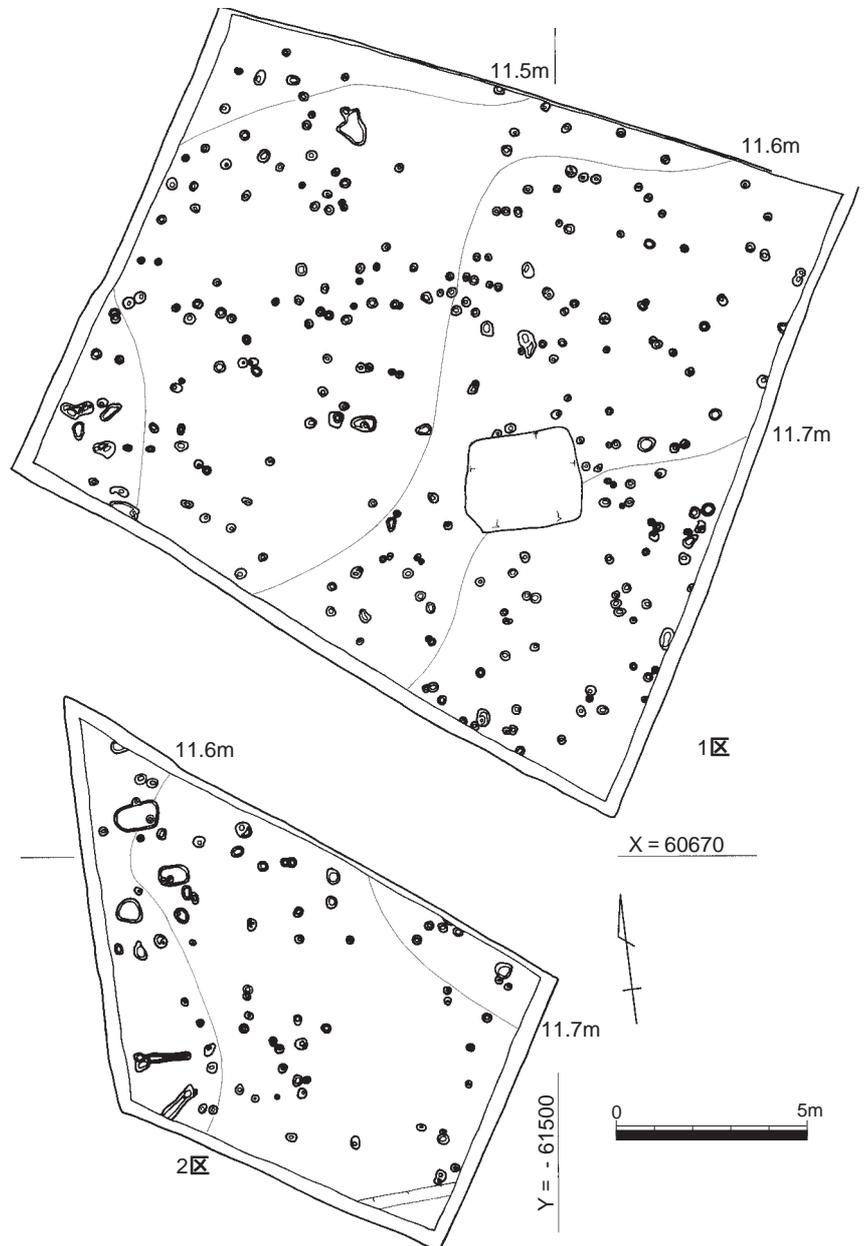


Fig.17 区遺構配置図(1/200)

4. 区の調査

5次調査2区の西側に位置し、5次調査時に現行の水路が使用されていたため、今年度調査を行った。Fig.3に見られる70×80mほどの方形を成す区画の南東端にあたる。この区画はFig.2の明治34年の地図に記載されている高石の集落にあたる。屋敷地の成立時期を確認することが今回の調査の主眼のひとつであった。調査前の試掘では、盛り土、旧表土下の黄褐色土上面にピット等の遺構を検出し、屋敷地等に伴う可能性を考慮し実施した。

調査区は、現在宅地で標高12.7mを測り、東側の水田より20cmほど高い。それに沿う水路にはU字溝が設置されている。調査はU字溝、宅地の盛り土を重機で除去する事から開始した。

遺構面は 層真砂土、 層現代表土、整地層、 層遺構覆土、 層旧表土（暗褐色土クロボク状）下の 層黄褐色シルト上面である。（Fig.20）遺構面は南東側のコーナーに向かって若干の傾斜がある。検出した遺構は、溝、土抗、ピットである。

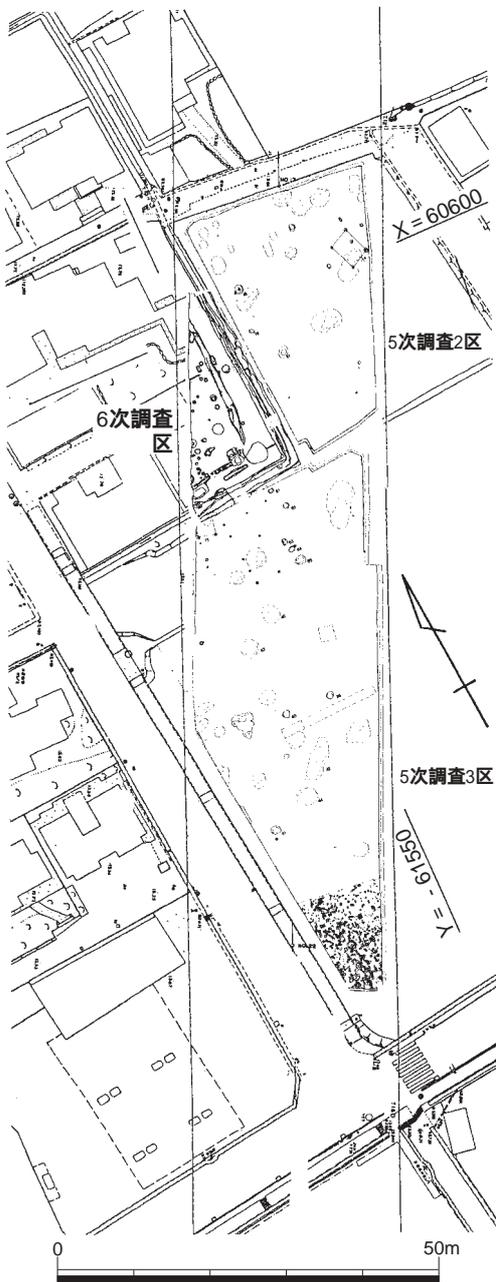


Fig.18 区位置図(1/1000)

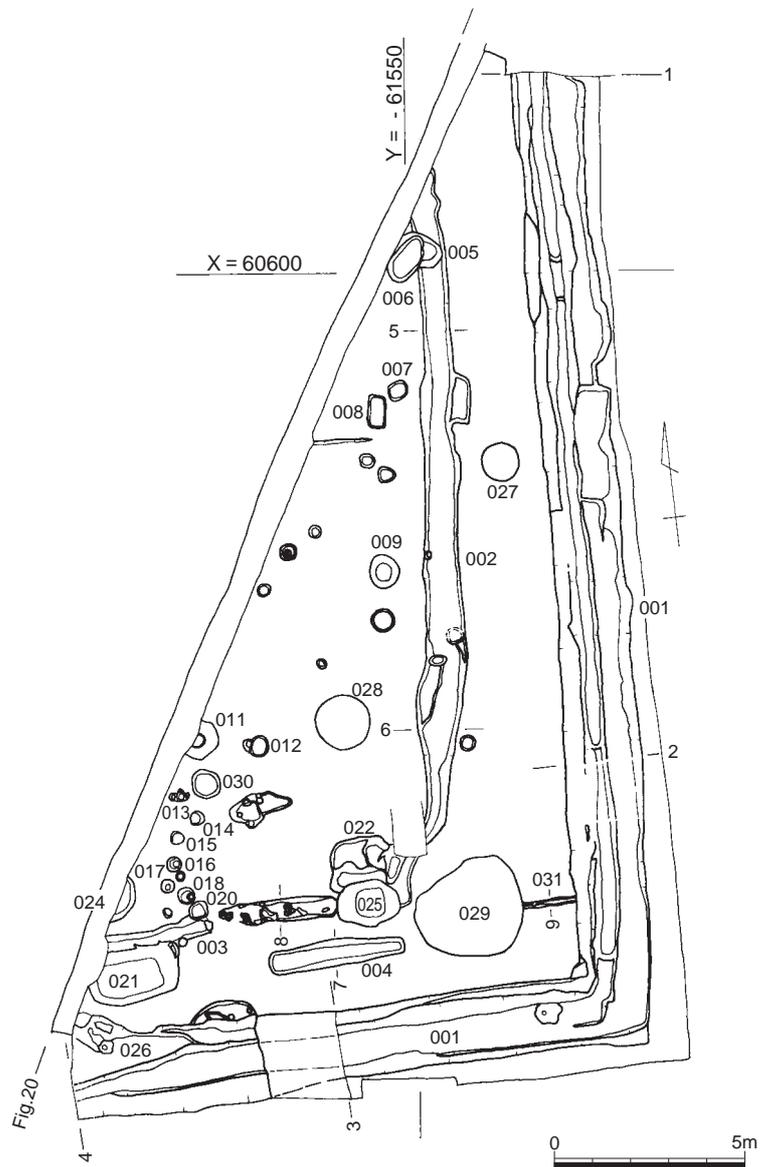


Fig.19 区遺構配置図(1/200)

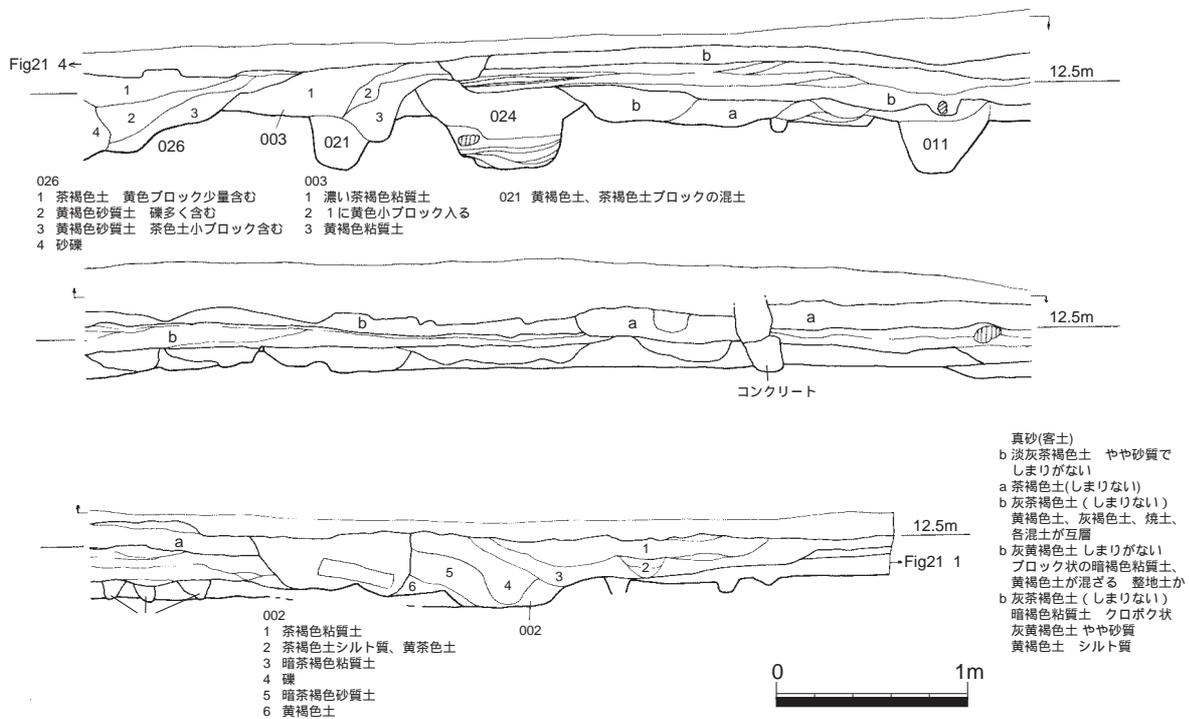


Fig.20 区西壁実測図(1/40)

(1) 溝

SD001(Fig.19、 Ph24、 25) 調査区の南、東辺に沿い、南東隅で直角に屈曲する溝で現況はバラス敷きの上にコンクリートのU字溝が設置されている。その下にU字溝設置以前の溝SD001が同じ位置に巡ると考えられるが、SD001はU字溝設置時に掘削を受け、南側の東西方向部分では失われている。東側の南北方向部分にははかるうじて残る。その断面はFig.21の土層1、2に見られる。SD001の残存する現況は幅60cm、深さ15cmほどで水性の青灰色粘土が堆積する。有機質を多く含む。底の標高は北端で11.75m、南端で11.55mである。遺物はわずかに出土している。

出土遺物 (Fig.22) SD001出土の遺物は101、102、103の3点のみである。101は陶器の皿で内面に緑灰色の釉の上に、乳白色の釉を流す。外面は露胎である。102は石墨で断面6.2×5.0mmで楕円形を呈す。103は陶器のすり鉢で外面に薄い茶褐色の釉を施し、畳付きは露胎である。内面は無釉で粗い擦り目を入れる。104、105はバラス、その上の埋土出土で、溝の遺物とは限らない。この他に磁器、陶器が出土している。105は染め付けの碗。プリントで花、蝶を描く。104は磁器の碗で深い青緑色の釉を施し、畳付きは露胎である。上層からは現代を中心とした、陶器、磁器等が出土している。

SD002(Fig.19、 20、 21、 Ph26) SD001の2.2mほど西を南北に直線的に走る溝で幅70cm、深さ15cmを測る。検出面では底のみが残存し、実際は 層直下から掘込む (Fig.20)。覆土は暗灰褐色砂質土でしまりがない。近代以降の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig.22) 磁器、陶器、瓦質土器、瓦、鉄滓が出土し、時期は近代以降である。一部を示す。106は陶器の蓋で薄い透明の釉を施し、口縁部は無釉で淡橙色を呈す。107は土師質の鉢状の口縁部で湯口が一カ所に作られる。外面は煤ける。108は染め付けの皿で内面は型紙、外面は染め付けで深い藍色の施文を施す。109は磁器の皿で内面に青と深い紺色で施文する。110は陶器の壺で淡い灰緑色の釉を外面に施し内面に垂れる。さらに口縁部には淡い青緑色の釉を流す。111は砥石でいわゆる天草石と呼ばれるものである。4面を使用する。この他に磁器、陶器、鉄滓、鉄製品等が出土している。

SD003(Fig.19、 20、 21) 調査区南側の東西方向の溝で検出したのは幅55cm、深さ6cm。途中で切れるが、堀込み面はFig.20に見られるようにさらに上で深さ40cmはある。覆土は黄褐色粘質土と黄茶褐

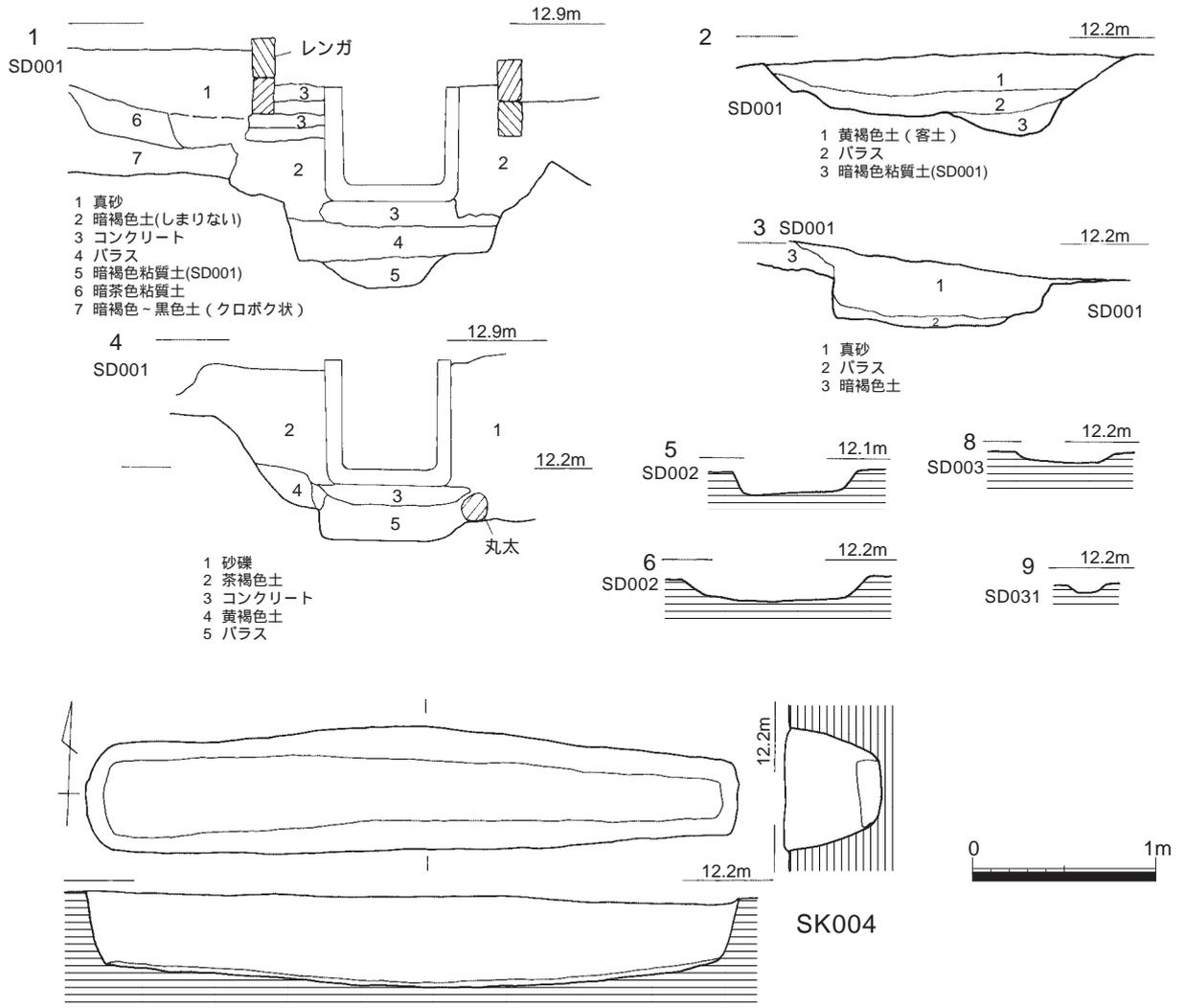


Fig.21 溝断面、SK004実測図(1/40)

色粘質土である。SK021を切る。遺物は現代の磁器と陶器、土師器の小片がわずかに出土している。SD031(Fig.19) SK029の東にある、東西方向の溝で幅18cm、深さ5cmを測る。覆土は灰褐色砂質土で遺物は出土していない。

(2) 土抗

SK004(Fig.21、 Ph.29) SD003の南で東西方向に長軸を持つ溝状の土抗である。長さ356cm、幅68cm、深さ50cmを測る。覆土は緑色かかった灰褐色土でしまりがない。遺物は少なく陶器のすり鉢の破片が出土している。

SK005(Fig.23、 Ph.27) 調査北側で検出した平面楕円形の土抗で116×90cm、深さ32cmを測る。SD002、006に切られる。灰茶褐色土を覆土とし、少量の土師器片が出土した。古墳時代の遺構と考えられる。

SK006(Fig.23、 Ph.27、 28) SK005を切る土抗で一部調査区外にでる。平面楕円形を呈し、110×60cm、深さ50cmを測る。断面フラスコ状を呈し、上端より下端が大きい。黒褐色土を覆土とする。遺物は検出していない。同様の遺構が5次調査2区で出土している。

SK007(Fig.23) 平面は円形に近く、径50cm、深さ15cmほどを呈す。覆土は灰褐色土でしまりはない。遺物は出土していない。

SK008(Fig.23) 平面長方形で84×44cm、深さ9cmを測る。長軸はSD002と方向を同じくする。覆土

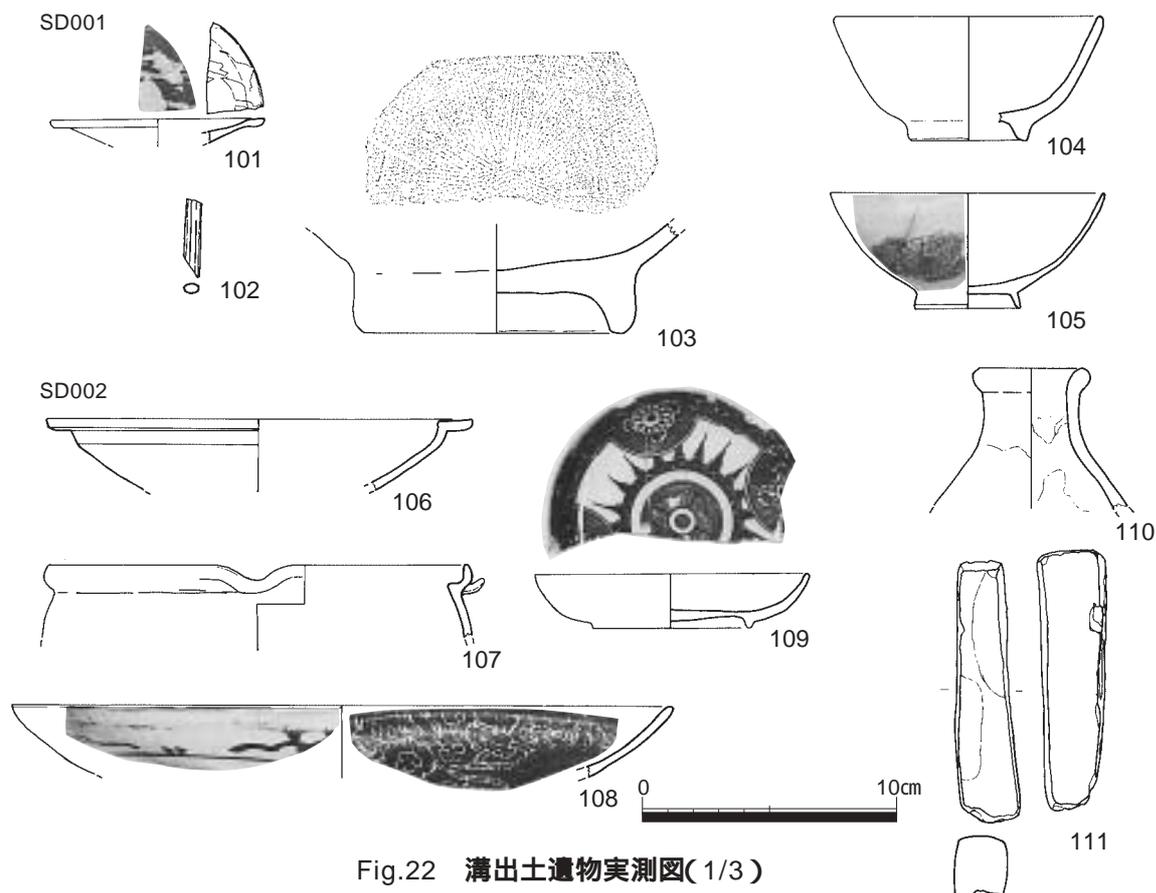


Fig.22 溝出土遺物実測図(1/3)

は灰褐色土で砂を含みしまりがない。瓦片が出土している。

SK009(Fig.23) 平面不整形円形で78×85cm、深さ35cmを測る。断面すり鉢状を呈す。覆土は暗褐色土でやや粘質。10cm大の礫が多く入る。

出土遺物 (Fig.24) 113は筒丸碗で内面は白色の釉がかかり、外面は暗褐色の釉を刷毛等で施し横方向の縞状を成す。114は陶器のすり鉢で淡い茶色の釉を薄く施す。他に陶器の甕、古代以前の土師器の甕の破片が出土している。

SK010(Fig.23) 平面円形で径28cm、深さ15cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で底に厚さ7、8mmほどで、丁度遺構のプランと同じ大きさの円形の板があった。

出土遺物 (Fig.24) 115は鈍い茶色を呈す釉を内外面に施すすり鉢で、胎土に砂粒を多く含む。他に染め付け小片がある。

SK011(Fig.23、20、Ph.30) 1/2弱が調査区外で平面円形を呈すと考えられ、径100cm、深さ50cmほどである。断面すり鉢状で底はピット状を成す。覆土は暗茶褐色土と灰褐色粘質土ブロックが互層となる。土層に現れる堀込み面は旧表土の層で、少なくとも層より下からの堀込みである。土製の鈴、古墳時代の可能性がある土師器小片が出土している。

SK012(Fig.23) 径50cm、深さ25cmほどのピット状を呈す。覆土は灰茶褐色土でしまりはない。染め付け小片が出土している。

SK021(Fig.23) 平面隅丸長方形を呈し北西隅が調査区外に出る。Fig.20土層のようにSD003に切られる。平面240×140cm、深さ55cmを測る。覆土は暗褐色粘質土に黄褐色土ブロックが入る。

出土遺物 (Fig.24) 117は深い碗形を呈す染め付けで、外面に青色の線描きで絵を描くが薄くよく見え

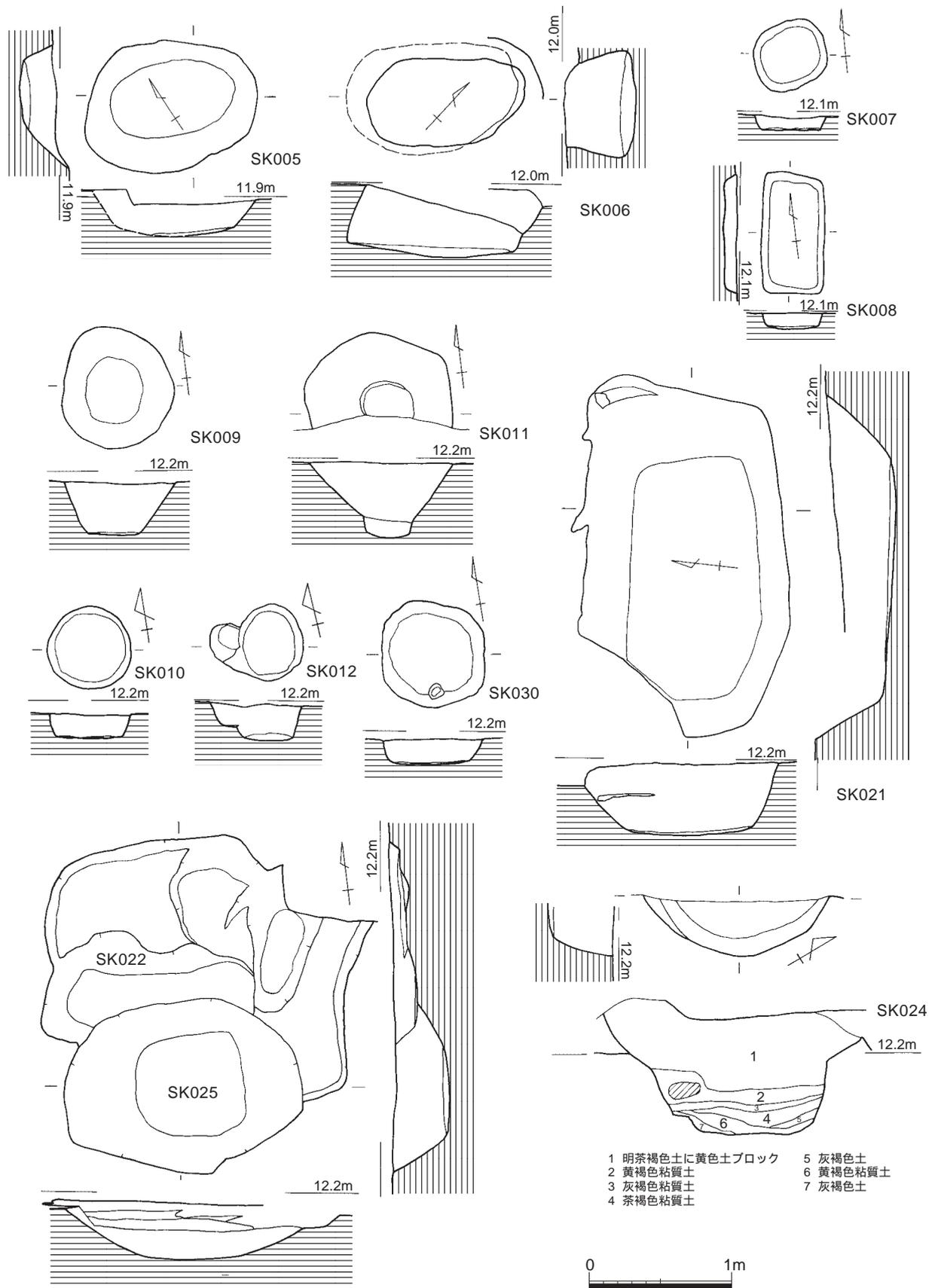


Fig.23 土坑実測図(1/40)

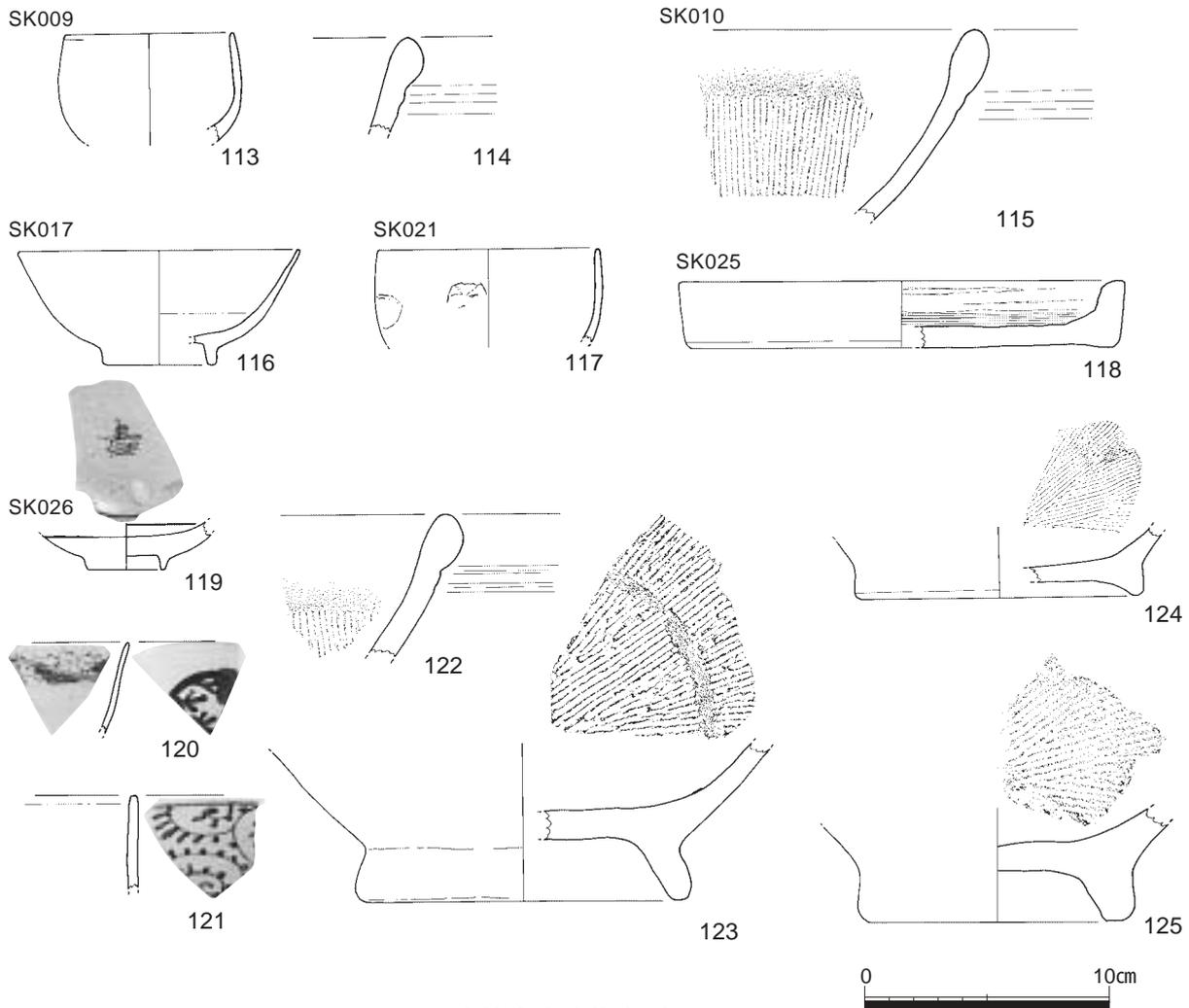


Fig.24 土抗出土遺物実測図(1/3)

ない。外面はわずかに煤け2次焼成を受けている。他に瓦質土器片、古代以前の土師器甕片が出土している。

SK022(Fig.23) 東西方向に長軸を取る浅いくぼみで、南半が深く2つが重なっていると考えられる。SD002、025に切られる。灰褐色土を覆土とし、遺物は出土していない。

SK024(Fig.23、20) 弧を描く遺構の一部を調査区際で検出した。平面円形を呈すのであろう。径130cm以上で深さは土層から95cmを測る。覆土は上部は明茶褐色粘質土に黄色土ブロックがまざり、下部は黄褐色土、灰色土、茶色土が薄く溜まる。Fig.20に見られるようにSD003に切られ 層より下からの掘削である。遺物は少なく磁器の小碗、陶器、土師器片が出土した。

SK025(Fig.23) 平面不整長方形を呈し、SD002、003、SK022を切る。平面168×124cm、深さ30cmを測る。

出土遺物 (Fig.24) 118は瓦質の盤状を呈し、内面底に擦り目状の掻目を同心円状に施す。

SK026(Fig.19、20) SD001の上層に切られる。土抗か段落ちか不明。検出した深さ38cmを測る。Fig.20の土層に見られるように 層下からの掘込みでSD003より新しく、深さ60cmを測る。南側はそのままSD001上層の埋土となる。遺物を多く含む。

出土遺物 (Fig.24) 119は染め付け碗で見込みに昆虫文が見られる。釉は淡灰色呈す。120は染め付け碗の小片で深い青色の絵を描く。121は鉢であろうか、濁った白色釉の外面に唐草文を描く。122から

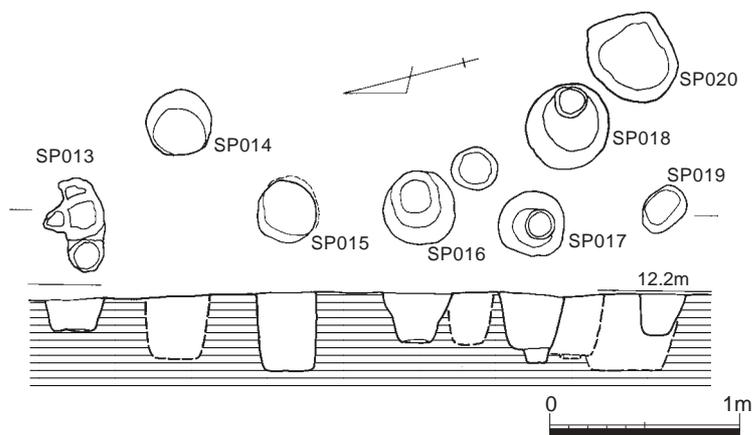


Fig.25 ピット断面図(1/40)

124は陶器のすり鉢である。122はくすんだ淡茶色の釉を薄く内外面に施す。123はくすんだ茶色の釉を厚く施す。畳付きは露胎である。畳付き、見込みに胎土目が見られる。胎土は砂粒を含む。124は茶褐色の明るい釉を厚く施し、外面底部は薄い。125は土師質のすり鉢で淡橙色を呈し、胎土に砂粒を含む。

その他、SK027、028はコンクリート枠の井戸、029は樹木移設時の堀込みで掘削を行わなかった。

(3) ピット (Fig.25、Ph.31)

調査区西よりでピットを検出した。その中で南西側に集まるものをFig.25に示した。SP013から020のうち013と019は灰色土を覆土とし、他は暗褐色から黒色土を覆土とする。016から018は柱痕跡を持つ。015からは陶器の小片、017からは磁器、土師器片が出土し、他からは古墳時代のものを含む古代以前の土師器小片が出土している。

(4) 小結

区で検出した遺構はいくつかのピット、SK005、006が古代以前にさかのぼる可能性がある他は、近代以降のものである。

屋敷地に沿うSD001は、U字溝以前の遺物が少なくはっきりとした時期が決めがたい。少なくとも出土した遺物は明治以降のものである。また、さらわれていることを考えるとこの遺物が溝の成立時期を表すとは限らない。さらにこの溝は、屋敷地中央を縦断する道路に沿った溝から派生したものであり、屋敷地成立後に構築されたとも考えられる。

区画内で検出した遺構は溝、土抗、ピットだが、先に挙げた数例を除き、確実に近世に遡るものはない。今回の調査は屋敷地縁辺の一部であり、未調査部分に近世以前の遺構が残る可能性があるが、この区に限れば遺構として残っているのは明治以降である。地図資料では再三取り上げるFig.2の明治34年のものに記載され、方形の区画が見て取れる。また、文献資料では江戸期～明治22年の村名として次郎丸村が、そしてその枝郷として高石村・立屋敷村が取り上げられ(元禄郷帳、天保郷帳)(『角川日本地名大辞典 40 福岡』1988)この集落がそのままの形態とは限らないが、元禄年間には成立していたことが伺われる。さらに筑前國續風土記拾遺によると、立屋敷の集落には「四方に高土手」が築かれ、その由来は当時すでに記憶されていない。高石についての記述はないが、当地在住の方の実際の記憶では、SD002付近に南北方向の土手があったという。立屋敷の高土手と同様のものがあった可能性は十分考えられる。古いものであればSD002掘削時に壊されたのであろうか。少なくともFig.20の土層には、痕跡は見あたらない。

今後、屋敷地内、近隣の調査が重ねられることによって、江戸時代以前に成立したと考えられる区画を遺構としてとらえるとともに、この地に村落が集約されていく過程を叙述できるようになることに期待したい。

おわりに

最後に各区、時期ごと調査の概要と周辺遺跡との関連についてふれておきたい。

区で検出した遺構は弥生時代中期の土抗6基、掘建柱建物1棟、ピット多数、時期不明の溝1条、土抗4基である。特に弥生時代の土抗からは土器を中心とした遺物が多数出土した。そのうちSK001の土器は中期中頃の一括性の高い資料と言えよう。この土抗を含む弥生時代中期の遺構は調査区東側に集まり、1次調査3区の分布と合わせて南北80m以上の分布が微高地上に広がると推定される。次に溝SD009は条里の方向とは合わず、自然地形に沿い、この場所での条里形成以前の所産と考えられる。周辺では、次郎丸高石遺跡第2次調査1区で13世紀に開削された条里に沿った溝が検出されている。SD009はこれより古い可能性が高いが、1次調査1区の溝1から4において条里に合わない溝から糸切り底の土師皿が出土しており、この辺りが中世においても自然地形の影響が強く条里が成立していない部分があった可能性がある。ただし、溝1から4と溝5は覆土が異なり、時期、性格のいずれかが異なるようである。

区では多数のピットを検出した。このピットは人為的なものではなく、根株痕等と考えられるが明確な成因はわからない。5次調査1、2、3区でも同様のピットが広がっている。

区は文献から近世以前に成立したと考えられる屋敷地の一端の調査であったが、明らかに近世以前の遺構は確認できなかった。ただし、遺物には近世の陶磁器等があり、周囲に存在する可能性がある。

次に遺跡全体を視野に、時代ごとの様相をみておきたい。

縄文時代以前では、1次調査で西平式土器、晩期土器、突帯文古層の溝状遺構と土器石器群が出土。2次調査区では御子柴文化の系譜を引くという安山岩製局部磨製石斧が遺構面下の暗灰色から黒灰色粘質土中から出土している。出土層は5、6次調査でクロボク状とした土壌と考えられる。3次調査では曽畑系の土器、早期の鋤形鍬等の石器、ナイフ型石器期の可能性がある石器があるが遺構、土層からは遊離している。5次調査では石鍬が出土したが、6次調査では見られない。周辺では、次郎丸遺跡で並木式土器と削器、石斧等の石器、刻目突帯文土器がある。免遺跡2次調査ではアカホヤ火山灰層が残り、その上下層から条痕文土器、削器等の石器が出土している。アカホヤやクロボク状の土壌が残存していることを考えると、この周辺には縄文時代の遺構面の存在を再確認できる。

弥生時代では1次調査3区、2次調査、6次調査1区でピット、土抗等の遺構、3次調査で土器等の遺構を確認した。いずれもほぼ中期に収まる時期で、遺構は先にふれた1次、6次にまたがる微高地、2次調査でも微高地に分布し、周辺に水田等が営まれる景色が想像される。

古墳時代では2次調査区で4世紀から5世紀初めの土抗と掘建柱建物、溝、3次調査で前期の河川、5次調査で前期の土抗を検出した。また次郎丸遺跡1、3次では5世紀前半の大溝、免2次では4世紀後半、6世紀後半のアーチ状の井堰を検出し、大がかりな水利施設の普請が行われている。

古代では3次調査地点で古墳時代からの溝が8、11世紀に埋まる。「城司」などの墨書土器から南側に官衛的集落の散在が予想される。

中世では3次調査で13世紀に掘削し15世紀に埋まる条里に沿った溝、道路と15世紀前後の掘建柱建物15棟、土抗、井戸、溝からなる集落がある。5次調査では掘建柱建物1棟が検出した。また次郎丸遺跡1から3次には掘建柱建物が22棟あり、1次では12世紀から16世紀、2次では12世紀から13世紀、3次では中世とされている。これらの集落は、次郎丸遺跡のものが近世の次郎丸本村、次郎丸高石遺跡3次のものが立屋敷村、5次調査のものが立石村に変遷したとすることもできようが、推測の域を出ない。それにしても5次の中世遺構は少なく周囲の遺構の広がりには注意する必要がある。



Ph.1 -1区全景（北東から）



Ph.2 -1区全景（南から）



Ph.3 2区全景(南から)



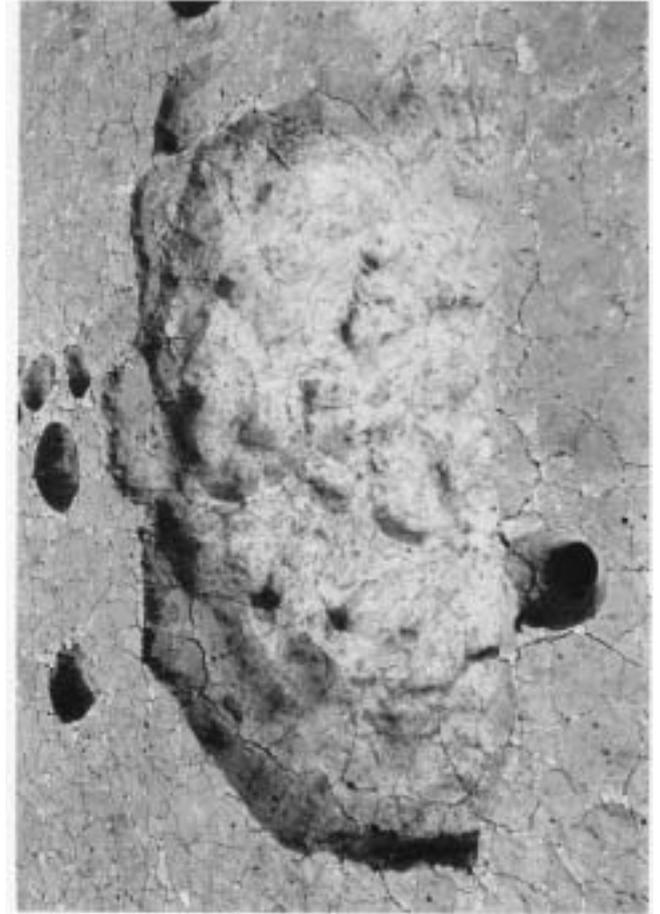
Ph.4 1区SK001(南から)



Ph. 5 -2区全景（北から）



Ph. 7 区SK001遺物出土状況（南から）



Ph. 6 区SK001完掘後（北から）



Ph. 8 区SK005（北西から）



Ph.11 区SK002 (北から)



Ph.12 区SB015 (東から)



Ph.9 区SK006 (西から)



Ph.10 区SK006完掘後 (北から)



Ph.15 SD009土層



Ph.16 区SK010 (南から)



Ph.13 区SD009 (北西から)



Ph.14 区SD009、SK011 (北西から)



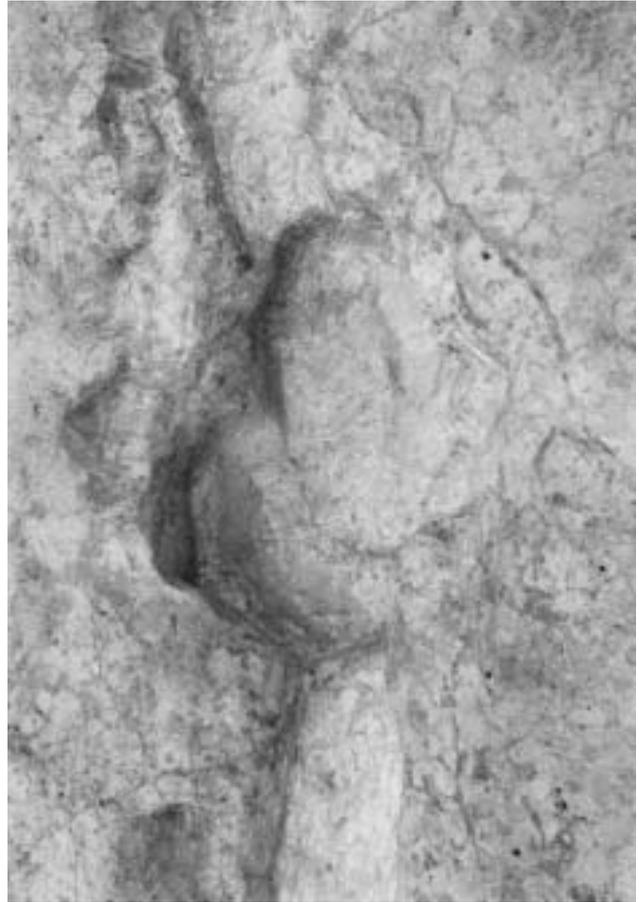
Ph.19 区SD013 (北から)



Ph.20 1区SK014 (南から)



Ph.17 区SB009、SK010土層 (東から)



Ph.18 区SK012 (南から)



Ph.21 区全景(北から)



Ph.22 -2区全景(東から)



Ph.23 区全景（南から）



Ph.24 区SD001（南から）



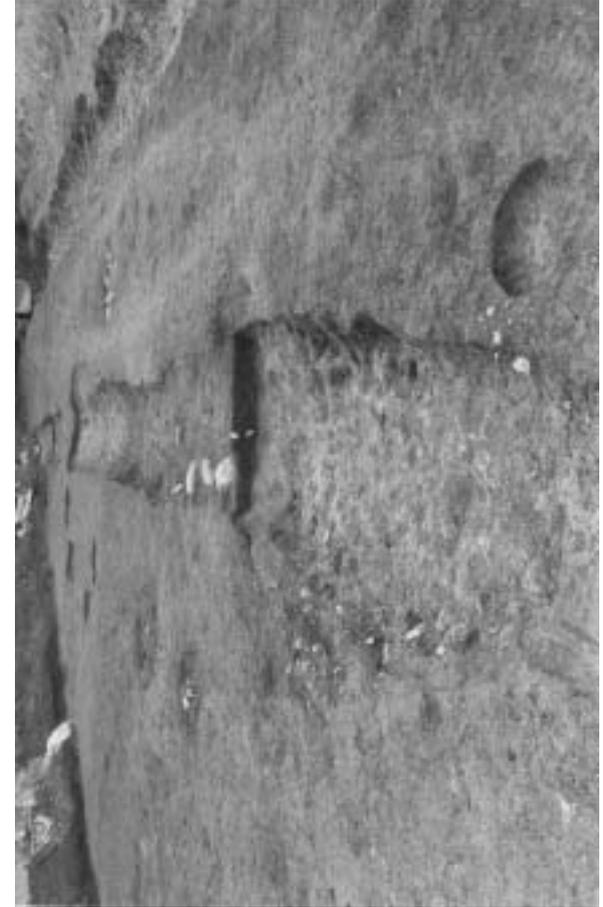
Ph.27 区SK005、006 (東から)



Ph.28 区SK006 (北から)



Ph.25 区SD001 (西から)



Ph.26 区SD002 (南から)



Ph.29 区SK004 (南東から)



Ph.31 区ピット群 (西から)



Ph.30 区SK011 (南東から)



Ph.32 区西壁土層 (南東から)

報告書抄録

書名ふりがな じろうまるたかいし2

書名 次郎丸高石2

副書名 次郎丸高石遺跡第6次調査報告

巻次

シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書

シリーズ番号 840

編著者名 池田祐司

編集機関 福岡市教育委員会

発行機関 福岡市教育委員会

発行年月日 20050331

作成法人ID 40137

郵便番号 810 8621 電話番号 092 711 4667

住所 福岡市中央区天神1 8 1

遺跡名ふりがな じろうまるたかいし

遺跡名 次郎丸高石遺跡第6次

所在地ふりがな ふくおかしさわらくじろうまる

遺跡所在地 福岡市早良区次郎丸6丁目

市町村コード 40137 遺跡番号 0315

北緯 33°32'58" (世界測地系)

東経 130°20'8" (")

調査期間 20030511 20040130

調査面積 1307m²

調査原因 道路建設

種別 集落、生産地

主な時代 弥生/古墳/近代

遺跡概要 弥生中期 - 土坑6 - 掘建柱建物1 - ピット - 土器 + 砥石/近代 - 溝 - 土抗 - 磁器 + 陶器

特記事項

次郎丸高石遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第840集

2005(平成17年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

TEL(092)711-4667

印刷 石橋印刷株式会社

福岡市博多区東比恵3丁目21番10号

TEL(092)411-0544